Jyu roku chou hira ta

拾六町平田遺跡

―― 第１次調査 ――

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第305集

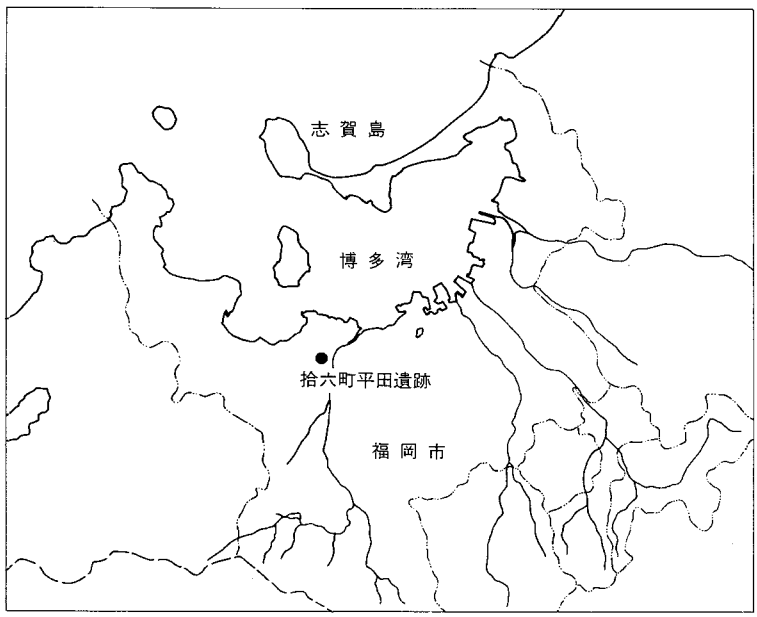
１９９２

福岡市教育委員会

Jyu roku chou hira ta

拾六町平田遺跡

第１次調査



遺跡略号　JRH-1
遺跡調査番号　8927

1992

福岡市教育委員会

第２面　水田址全景

序

福岡市の西部にある早良平野には、室見川が作り出した沖積地が拡がりかつては青々とした水田地帯が拡がっていました。しかし、今宿バイパスの開通後は急速に市街化が進み、往時の面影は次第に失われつつあります。

拾六町平田遺跡は、早良平野西縁に連なる長垂山の東麓にあります。この一帯には湯納遺跡・下山門遺跡・拾六町ツイジ遺跡や城原廃寺等の縄文時代から歴史時代までの様々な遺跡が分布しています。

今回発掘調査した拾六町平田遺跡は、十郎川と名柄川とに挟まれた沖積地帯で、弥生時代から古墳時代の水田址を検出しました。このことはこの地が二千年の昔から米作りの場として活用され、営々と今日まで耕し続けられたことを物語るものです。

本書はこの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民の皆さんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間にはご指導・ご助言をいただいた諸先生方を始め、多くの方々のご協力をいただきました。殊に開発者の大和団地株式会社と施工者の末永工務店の方々には格別のご理解とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成４年１月13日

福岡市教育委員会

教育長　　井口　雄哉

れいげん

1．本書は、1989年度に福岡市教育委員会が福岡市西区拾六町字平田86番１において緊急発掘調査した拾六町平田遺跡第１次調査の発掘調査報告書である。

2．本書に使用した方位はすべて磁北方位である。

3．遺構は呼称を記号化し、水田址をＳＳ、溝をＳＤと記号化して呼称し、各面の遺構ごとのナンバーをその後に続けた。

4．本書に掲載した遺構の実測は小林・梶村嘉長が、製図は小林・藤村佳公恵が行なった。

5．遺物の実測は打製石鏃を杉山富雄が、木器を山口譲治が行ない、その外は小林が行なった。

6．本書に掲載した写真は遺構・遺物ともに小林が撮影した。

7．付論として、野井英明（北九州大学）氏に「花粉分析」についての原稿を頂いた。

8．本報告に係わる遺物・記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

9．本書の執筆・編集は小林が行なった。

遺跡調査番号：８９２７	遺 跡 略 号：ＪＲＨ－１	分布地図番号：90－Ａ－11
調 査 地 籍：福岡市西区拾六町字平田86番－１		
工 事 面 積：2,581㎡	調査対象面積：2,581㎡	調査実施面積：790㎡
調 査 期 間：1989年６月26日～８月10日		

本文目次

序
Ⅰ．はじめに…… 1
　1．発掘調査にいたるまで…… 1
　2．発掘調査の組織…… 1
Ⅱ．立地と歴史的環境…… 3
　1．立地と歴史的環境…… 3
　2．地形と地質…… 7
Ⅲ．調査の記録…… 9
　1．調査の概要…… 9
　2．第1面の水田址……11
　3．第2面の水田址……17
　4．第3面の水田址……26
Ⅳ．おわりに……30
付論　拾六町平田遺跡第1次調査の花粉分析（北九州大学：野井英明）……31

挿図目次

巻頭図版　第2面水田址全景
Fig．1　周辺遺跡分布図（1／25,000）…… 2
Fig．2　拾六町平田遺跡周辺地形図（明治33年 1／25,000）…… 4
Fig．3　拾六町平田遺跡位置図（1／8,000）…… 5
Fig．4　拾六町平田遺跡周辺現況図（1／1,000）…… 6
Fig．5　地質柱状模式図…… 7
Fig．6　調査区南壁土層断面図（1／80）…… 8
Fig．7　調査区南壁土層断面…… 9
Fig．8　第3層出土土器実測図（1／3）…… 9
Fig．9　第3層出土土器…… 9
Fig．10　第1面水田址遺構実測図（1／200）……10
Fig．11　第1面水田址全景（西より）……11
Fig．12　SD－01実測図（1／150）……12

Fig.13　SD－01全景（東より）……13
Fig.14　SD－01木器出土状況（南より）……13
Fig.15　SD－01出土土器実測図（1／3）……14
Fig.16　SD－01出土土器 ……14
Fig.17　SD－01出土木器実測図（1／5）……14
Fig.18　SD－01出土木器 ……15
Fig.19　第２面水田址遺構実測図（1／200）……16
Fig.20　第２面水田址全景（西より）……17
Fig.21　SS－203・207実測図（1／150）……18
Fig.22　SS－203・207全景（西より）……18
Fig.23　SS－205・210実測図（1／150）……19
Fig.24　SS－210遺物出土状況（東より） ……19
Fig.25　SS－205・206・211全景（西より）……20
Fig.26　SS－203水口址全景（東より） ……20
Fig.27　SD－03全景（北より）……21
Fig.28　SS－203木器出土状況（北より） ……21
Fig.29　第２面水田址出土土器実測図（1／3）……22
Fig.30　第２面水田址出土土器……22
Fig.31　第２面水田址出土石器実測図（1／1）……23
Fig.32　第２面水田址出土石器……23
Fig.33　第２面水田址出土木器実測図（1／5）……23
Fig.34　第２面水田址出土木器……24
Fig.35　第２面水田址出土建築材実測図（1／10）……25
Fig.36　第２面水田址出土建築材……25
Fig.37　第３面水田址遺構実測図（1／200）……26
Fig.38　第３面水田址全景（西より）……27
Fig.39　SS－301～310全景（北より）……27
Fig.40　SS－301～309全景（西より）……28
Fig.41　SS－305足跡検出状況（南より） ……28
Fig.42　第３面水田址出土土器実測図（1／3）……29
Fig.43　第３面水田址出土土器……29
Fig.44　第２面水田址面積一覧表……29
Fig.45　第３面水田址面積一覧表……29

Ⅰ．はじめに

1．発掘調査にいたるまで

福岡市の西部に拡がる早良平野は博多湾にむかって開口し、平野は度重なる室見川の氾濫によって形成された沖積地には一面に水田が続く自然の恵み多きところでした。しかし、急速にすすむ福岡市の人口増加は郊外の市街化を推し進め、埋め立てられた田畑には大型店舗や高層住宅が建ち並び往時の姿は次第に失われつつあります。

拾六町平田遺跡のある西区拾六町でも今宿バイパスの開通を機に周辺地域の宅地化が急速に進んでいます。こうした中で当該地における分譲マンションの建設が大和団地株式会社によって計画され、その旨の申請がなされた。しかし、申請地が「拾六町平田遺跡」として周知された地区内にあることから埋蔵文化財の有無確認が必要となり試掘調査を実施した。その結果、申請地からは生産遺跡としての水田遺構が重層的に検出され、発掘調査による記録保存を図った。発掘調査は遺跡の現状保存を第一義に考えて、遺構面が建物の建設によって破壊される最小の範囲についてのみ実施し、建物の周辺は現状のままで保存した。

発掘調査は1989年６月26日に開始し、弥生時代から古墳時代の水田址を３層検出して８月10日に終了した。これも大和団地株式会社を初めとする関係者各位のご理解と酷暑の中で発掘作業に従事された方々の協力に負うところが大きい。ここに記して感謝の意を表します。

2．発掘調査の組織

調査委託　大和団地株式会社

調査主体　福岡市教育委員会埋蔵文化財課

庶務担当　柳沢一男（前係長）　塩屋勝利（現係長）　阿部　徹（前任）　吉田麻由美（現任）

調査担当　小林義彦

調査・整理補助　梶村嘉長　田崎真理

なお、発掘調査と資料整理にあたっては下記の人々の協力をえた。

尾園　晃（九州大学）・小田　忠・篠原博之・松井一治・吉川春美・井上ヒデ子・大瀬良清子・川口シゲノ・木村良子・栗木和子・坂本ハツ子・崎田テル子・佐藤みずほ・田中聖子・谷吉美・田村和子・津川真千子・土斐崎孝子・永井鈴子・西嶋タツノ・西嶋洋子・橋本恵美子・秦　ミヤ・馬場イツ子・原ハナエ・堀尾久美子・松本藤子・真名子シズエ・森山早苗・吉岡ミツ子・吉住シヅエ・山下アヤ子・山田トキエ

また、野井英明（北九州大学）先生と山口譲治（福岡市埋文課）氏から貴重な指導・助言をいただいた。記して感謝したい。

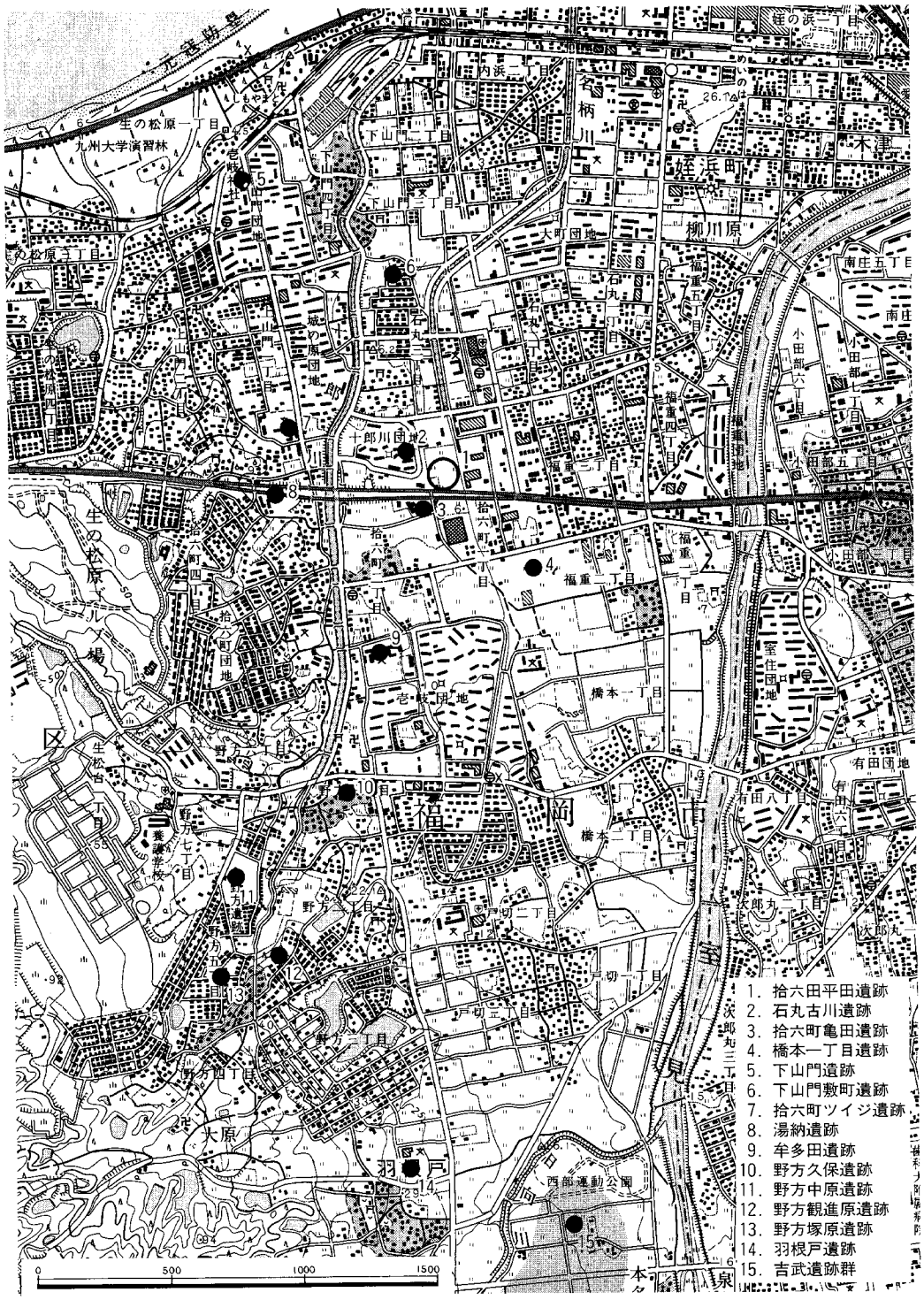


Fig. 1　周辺遺跡分布図（1/25000）

II．立地と歴史的環境

1．立地と歴史的環境

拾六町平田遺跡は、早良平野を北流する室見川左岸の西区大字拾六町字平田に所在し、福岡市文化財分布地図「西部Ｉ－90」で周知化されている。

早良平野は福岡市の西部に拡がる狭小な平野で、油山山塊の東には福岡平野が、飯盛山から長垂山とつづく小山塊の西には糸島平野がある。この平野は南縁を画す背振山地から流れだした室見川とその支流の小河川によって造り出された沖積地と博多湾岸の海岸砂丘によって形成され、平野内には第三紀丘陵と洪積台地が点在している。

拾六町平田遺跡は、この早良平野西北部の平野口にあり、飯盛山から派生し長垂山の山裾を縫って生の松原へと流れ出る十郎川右岸の沖積地上に立地する。この十郎川左岸の飯盛山から長垂山へとつづく小山塊から派生する舌状丘陵の裾部には各期に亘る数多の遺跡群が展開し漸次沖積地へと拡がっていく。

室見川左岸域における旧石器～縄文時代の遺跡は少ない。旧石器時代では台形石器を出土した羽根戸遺跡や吉武遺跡群がある。つづく縄文時代では後期の貯蔵穴群からなる吉武遺跡群があるがいずれも連続性をもたない。晩期になると遺跡数は次第に増加する。本遺跡西の自然堤防上には石丸古川遺跡が、十郎川を挟んだ丘陵裾の開析谷には湯納遺跡がある。

弥生時代になると早良王墓として著名な吉武遺跡群を頂点として平野全域に急速に増加拡大していく。丘陵裾にはこの吉武遺跡群のほか中期初頭の甕棺墓から細型銅剣を出土した野方久保遺跡や終末期の墳丘墓として著名な宮の前遺跡、後期の環濠集落と漢式鏡を副葬した墳墓からなる野方中原遺跡等があり、弥生時代から古墳時代への権力移行と胎動が窺いえる。また、十郎川流域を始めとする沖積地上でも活発な生産活動が展開される。拾六町ツイジ遺跡や湯納遺跡、牟多田遺跡等からは木製農具や建築部材が出土し農業活動の様子も推し知られる。

古墳時代になると低丘陵を中心として集落が展開し、野方中原遺跡や野方柳原台遺跡、湯納遺跡、下山門南遺跡等がある。一方、前方後円墳等の首長墓としての前期古墳はなく、政治勢力の中枢は拝塚古墳等のある室見川右岸地帯へと移行していく。後期になると小山塊の裾野には小円墳からなる羽根戸古墳群や広石古墳群等の群集墳が広く展開し、沖積地を生産基盤とする社会体制の充実を窺わせる。また、吉武熊山古墳群には彩色壁画のある円墳がある。

歴史時代になると奈良～平安時代の寺院址として城ノ原廃寺や吉武遺跡群がある。生産遺跡としては金田城田遺跡や羽根戸遺跡で製鉄炉址が確認されているほか、下山門遺跡や石丸古川遺跡からは越州窯系青磁が出土している。また、拾六町平田遺跡周辺は『和名抄』に記された「額田郷」に比定される地域で、周辺には良好な条里遺構を留めている。

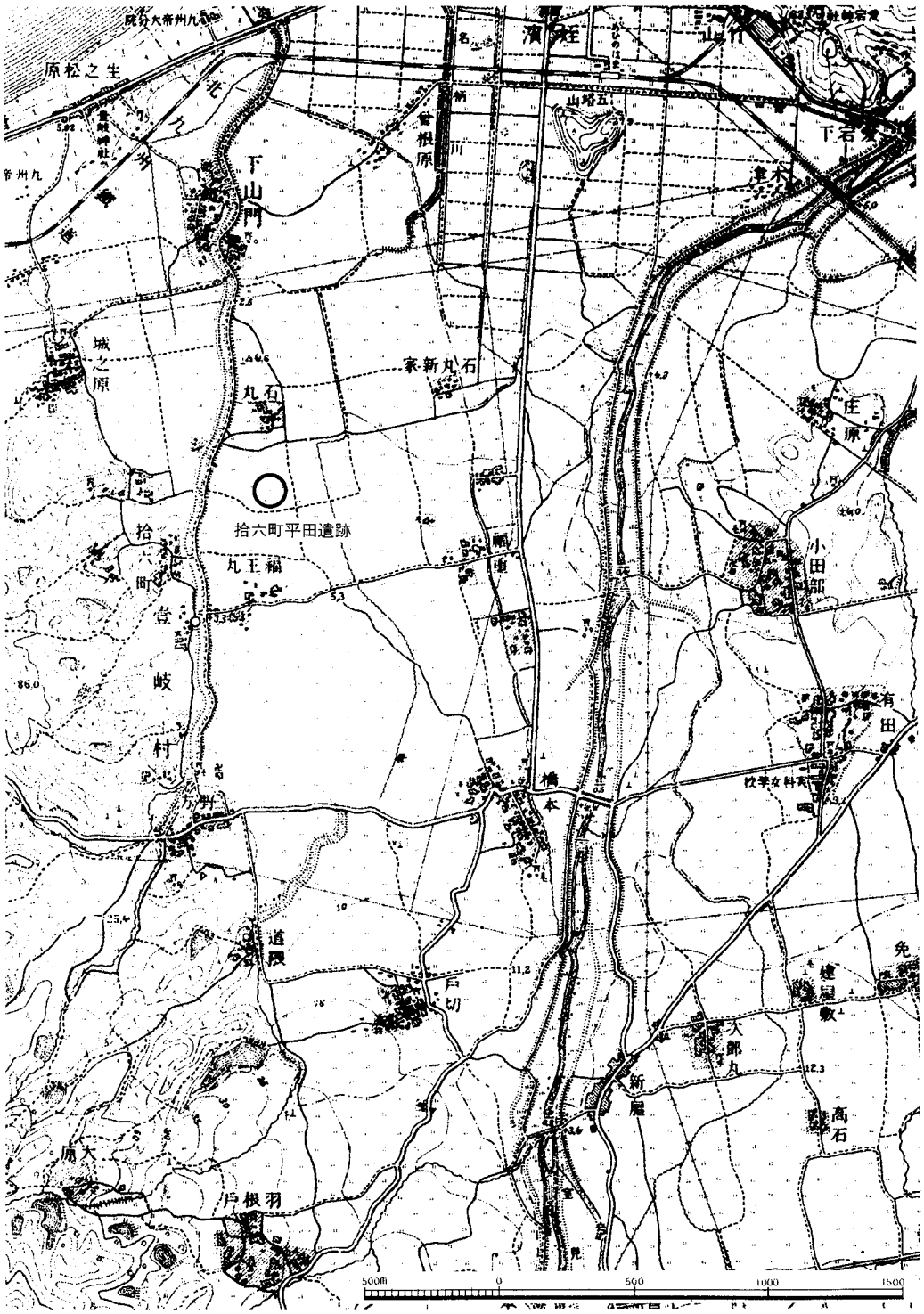


Fig. 2　拾六町平田遺跡周辺地形図（明治33年　1/25000）

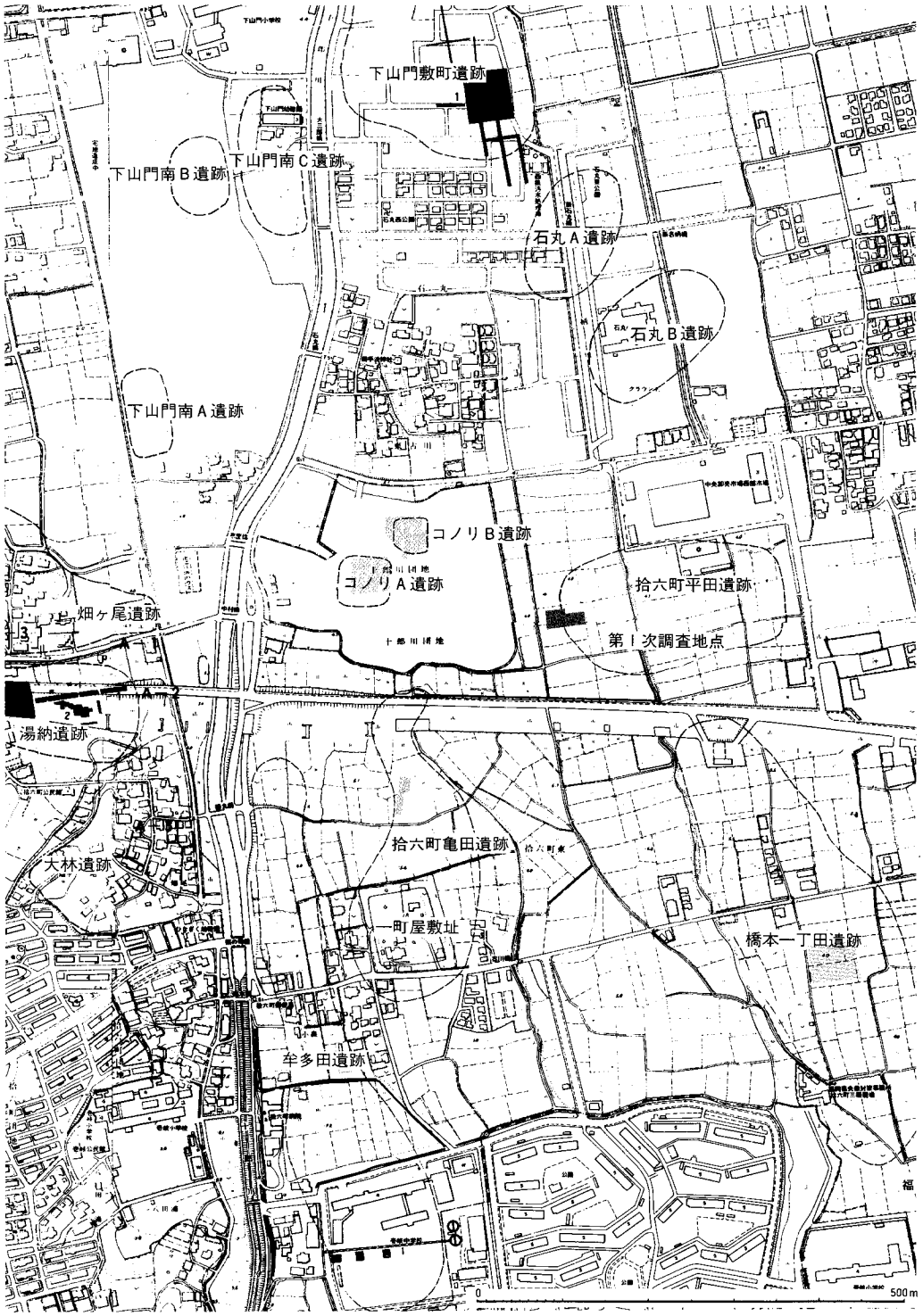


Fig. 3　拾六町平田遺跡位置図（1/8000）

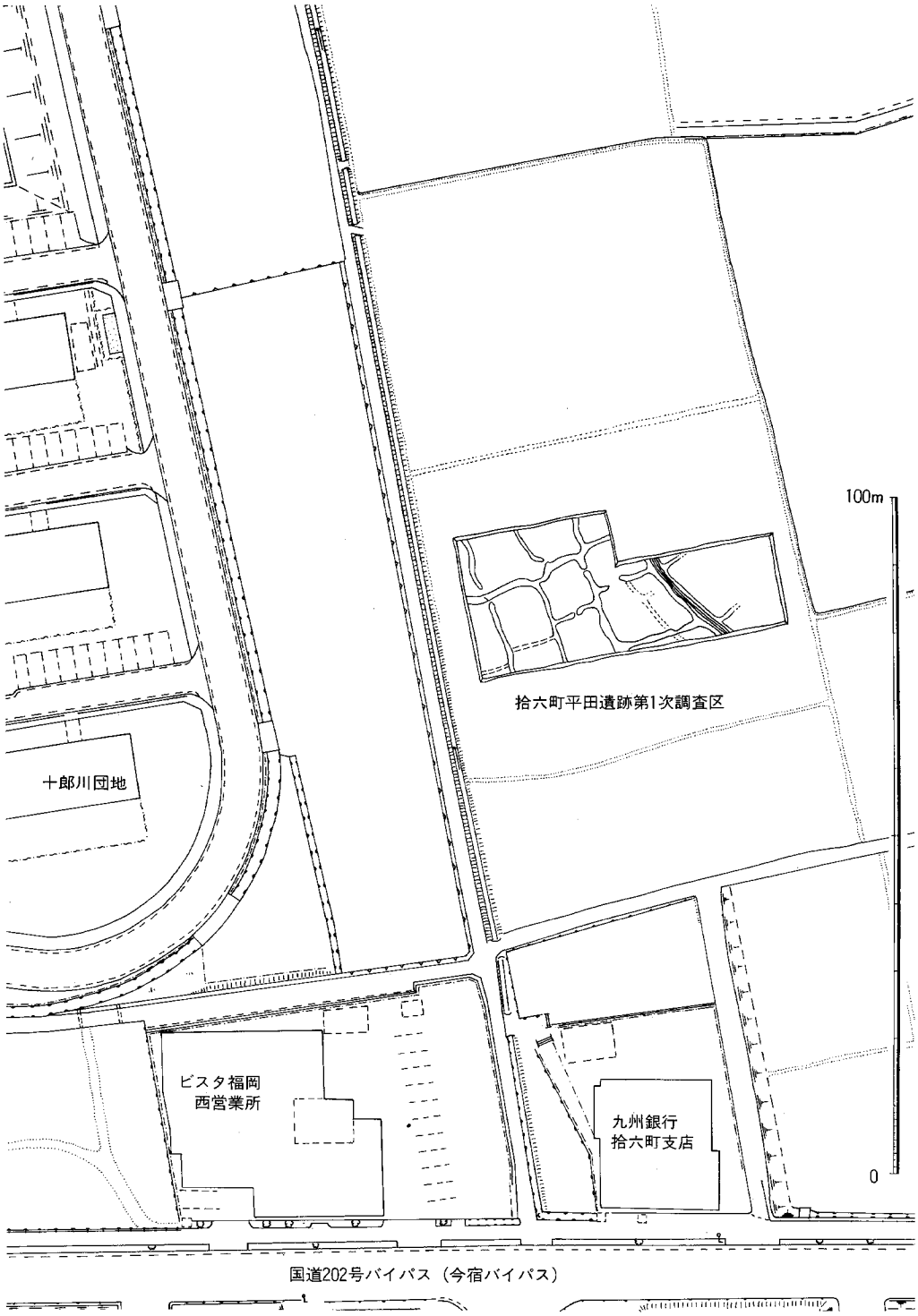


Fig. 4　拾六町平田遺跡周辺現況図（1/1000）

2．地形と地質

早良平野は、背振山系に源を発する室見川の侵蝕と氾濫によって造り出された扇状地と沖積地及び海岸砂丘からなっている。室見川上流域には侵蝕に弱い花崗岩の風化土である「真砂土」が広く分布していることから平野部への出口にあたる内野（標高55m）を扇頂とし、飯倉・有田（標高12m）から野方（標高10m）と繋がる扇状地が発達している。この扇状地端から海岸砂丘までの間には低平な沖積地が発達している。

拾六町平田遺跡は、早良平野北西口の標高4.1mを測る沖積地上に位置し、飯盛山から流れだした十郎川の河口から南へ2.15kmの距離にある。

拾六町平田遺跡周辺の地質（Fig.5）は、中生代白亜紀の早良花崗岩を基盤層とし、その上部には洪積層・沖積層が厚く覆っている。沖積層は上層から、表土層・砂混り粘土層・シルト質砂層・砂礫層からなり、地表下9mまで堆積している。洪積層は上下2層からなる。上部層は層厚7mの粘土混りの砂礫層で、層厚4mの下部層は礫混り砂層・粘土質砂層によって構成される。この洪積層は地表下20mに至って花崗岩風化土層の早良花崗岩へとつづく。ただし、東側は粘土混りの砂礫層が地表下24mまで続いて早良花崗岩に達し、山塊からのびる基盤層が室見川へむかって大きく傾斜する様子が窺える。早良平野の基盤層をなす早良花崗岩は、月隈丘陵から油山山塊、背振山北斜面、飯盛山、長垂山など福岡市の大部分を占める広い地域にわたって分布する。

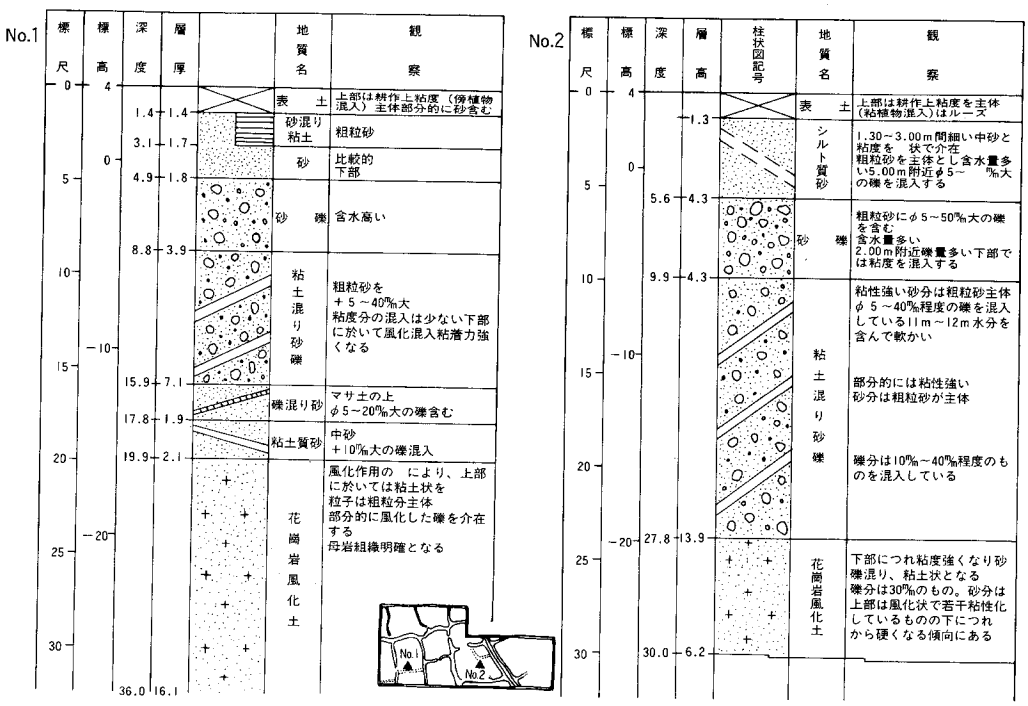
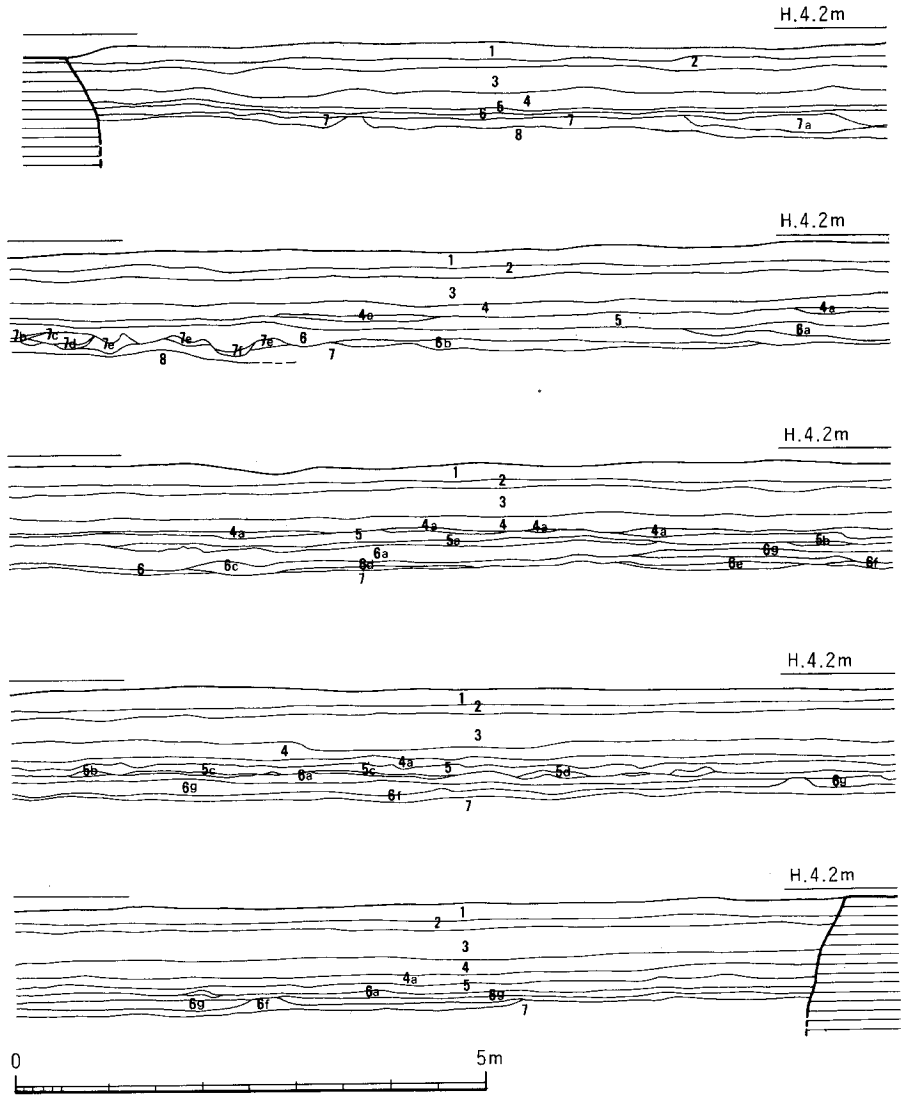


Fig. 5　地質柱状模式図



土層凡例：
1.灰黄褐色土層
2.黄褐色土層
3.灰黄褐色土層
4.暗灰黄色粘土層
4a.オリーブ黒色土層
5.暗灰黄色粘土層
5a.灰オリーブ粘質砂層
5b.暗灰黄色砂層
5c.暗灰黄砂層
5d.灰オリーブ色砂層
6.灰黄褐色粘質砂層
6a.灰色粘質砂層
6b.オリーブ黒色土層
6c.灰色粘質れき層
6d.オリーブ黒色粘質土層
6e.黒褐色粘質土層
6f.灰黄褐色粘質砂層
6g.黄灰色粘質土層
7.オリーブ黒色粘土層
7a.黒褐色粘質砂層
7b.灰色砂層
7c.暗灰黄砂層
7d.灰オリーブ砂層
7e.オリーブ黒色粘質土層
7f.砂層
8.灰色粘土層

Fig. 6　調査区南壁土層断面図（1/80）

Ⅲ．調査の記録

１．調査の概要

拾六町平田遺跡は、十郎川右岸に拡がる沖積地上にあり試掘調査の結果では、重層的な水田耕土が確認された。特に、十郎川に近い西側のトレンチでは砂層を被った足跡の残る水田耕土と杭列が検出され、その面的な確認が必要とされた。

発掘調査は、この試掘調査のデータをもとに水田耕土を覆う砂層の検出から始めたが、砂層は調査区西部の狭小な20×15ｍほどの範囲に薄く堆積するものであった。この砂層下からは東西方向に緩やかに蛇行して流れる溝と足跡を残した第１面目の水田耕土が検出されたが、その耕土の面的な確認は砂層下の範囲にとどまった。次に、この１面目の耕土を５～10cmほど取りのぞくと畦畔を伴う方形に区画された第２面目の水田址を検出した。畦畔の一部は途切れて水口部を作り、水祭祀に用いたであろうと思われる丹塗り土器の壺片も出土している。また、調査区の西側では南から北に流れる溝を検出したが、杭列や井堰等の取水施設はなかった。さらに、調査区の西部では、第２面の水田耕土下より第３面目の水田面を検出した。畦畔は東西と南北に直線的にのびるが遺存状況はよくない。耕土上には多数の足跡が残っていたが、水口等は検出できなかった。第２面と第３面の水田址は、畦畔の方向がほぼ同じで、田面規模も大差のないものである。

本調査では、３層の水田面を検出し、基本的な層序は上層より以下のようになる。

Ⅰ層：現耕作土

Ⅱ層：現耕作土の床土

Ⅲ－ａ層：灰黄褐色土層で有機質を含む

Ⅲ－ｂ層：暗灰黄色粘質土

Ⅳ層：オリーブ黒色土層で有機質を含む。第１面の水田址耕土である

Ⅴ層：暗灰黄色粘質土層

Ⅵ層：灰色粘質土層

Ⅶ層：黄灰色粘質土層で、第２面の水田址耕

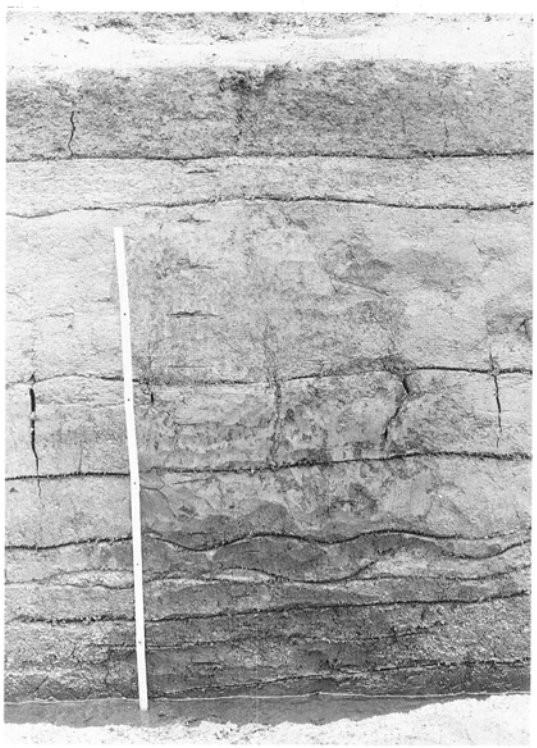


Fig. 7　調査区南壁土層断面

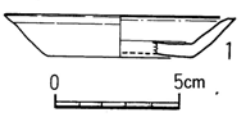


Fig. 8　第３層出土土器実測図（1/3）

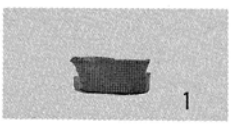


Fig. 9　第３層出土土器

土である。

Ⅷ層：灰黄褐色粘砂土層～オリーブ黒色粘質土層となる。第３面の水田耕土である。

Ⅲ～Ⅶ層の間には十郎川の氾濫によると思われる砂層が堆積しているが、面的な拡がりが摑める面はⅢ～Ⅳ層間の第１面の水田址上で検出された砂層だけである。

また、Ⅲ－１～２層は灰黄褐色土～暗灰黄色粘質土の水田耕土で、重層的に耕作され詳細な分層は難しい。このⅢ層中からは白磁皿や土師皿片が出土していることから古代から近世に至る水田面が重複し、連綿とした営農の跡が窺い知れる。

出土遺物（Fig.８・９）

１はⅢ層より出土したロハゲの白磁皿である。平坦に整えた口縁部は端部を小さく摘み上げ、復原口径9.2cm、底径5.8cm、器高1.6cmを測る。全体に不透明な灰オリーブ色の釉薬をかけるが、口縁部は掻きとっている。

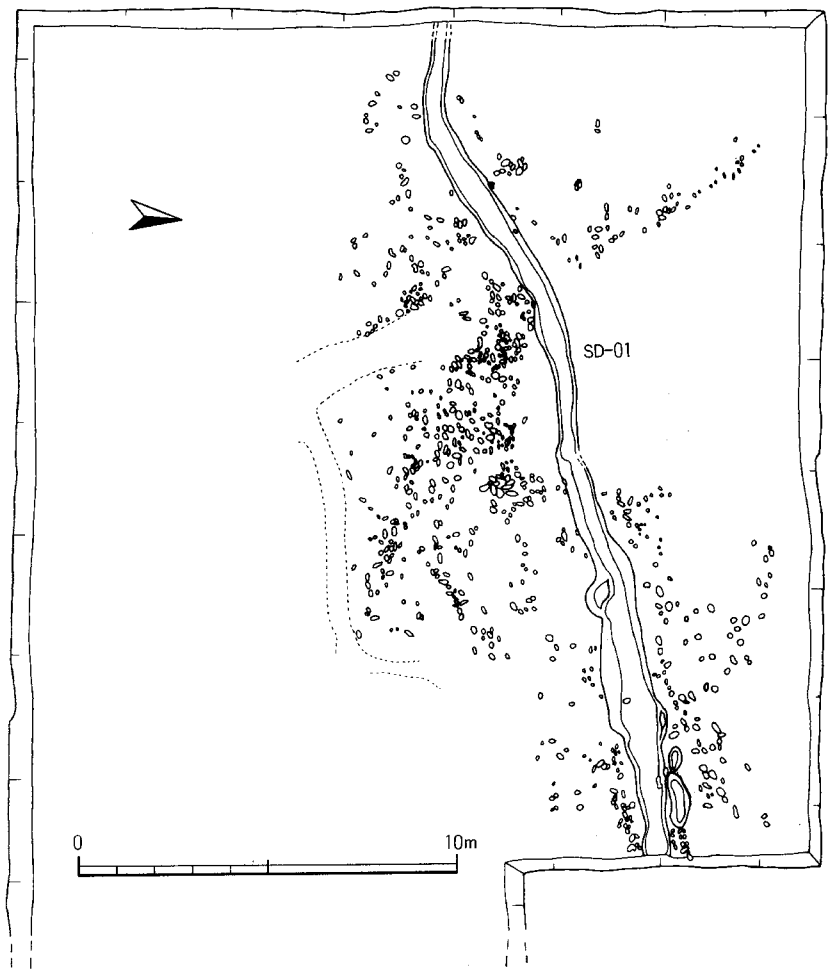


Fig.10　第１面水田址遺構実測図（1/200）

2．第１面の水田址

第１面の水田址は、現地表より70～90cm下層で検出された水田耕土面で標高は3.2～3.4ｍを測る。現耕土の床土を剝ぐと灰黄褐色土～暗灰黄色粘質土の水田耕土が40～45cmほどあり、その下層には十郎川の氾濫で押し流されたであろう砂層が堆積している。第１面の水田址遺構は、この砂層下で検出された。

試掘調査のデータでは、この水田址を覆う砂層は調査区全体を覆っているものと想定され、水田址も調査区全域に拡がっているものと思われた。しかし、砂層は調査区北西部の20×15ｍほどの狭小な範囲に薄く堆積するもので、水田面の低い北側では厚みを増す。水田址の検出は、上層に堆積する砂層の有無や厚薄によっては検出できない場合があり、本面でも砂層下の調査区北西部でしか調査できなかった。

第１面の水田土壌は、有機物を多量に含むオリーブ黒色土で耕土中には砂粒はあまり含んでいない。調査区の北側には幅50～90cmの溝が緩やかに蛇行しながら東流し、その両岸に水田面が拡がる。水田面は溝の南岸が高く、北岸側が一段低くなる。この溝の両岸からは多くの足跡が検出され、中には明らかに人のものと思われるものも多数あった。

畦畔は検出できず、水田区画を復原することはできなかった。ただし、溝南岸の足跡群中には50～100cmの幅で足跡が希薄になる面が帯状につづき、畦畔の基底面かとも思われる。また、

Fig.11　第１面水田址全景（西より）

北岸には2.0～2.5mの幅で杭列が2列溝まで続き、一部は溝を越えて東へのびる。一見大畦畔の護岸杭の如き感をなすが、これが第1面の水田址に伴うものかは明らかでない。

SD－01（Fig.12～14）

調査区の北部で検出した幅50～90cmの溝である。溝は緩やかに蛇行しながら南西方から北東方へ流れる。十郎川から引き込まれた水路であろう。現長は24mで深さは20～30cmを測り、断面形は浅い舟底状を呈する。溝の東側には南北の両岸各々1ヶ所に洗い場状の小さなフラット面がある。また、西端から約7m東の地点には2本の枝を横木状に渡し、その西側には杭状の木枝が東方向からやや鋭角的に打たれていた。溝の流路からすると水の流れに抗う状況をなし、井堰的機能の存在を予測させるが、杭等の明らかな人工痕がないために明確にはしえなかった。この木組の外には杭等の施設はない。覆土は、上層が細砂層、下層が粗砂層である。

覆土中からは流枝片の外にはわずかな土器小片と槽と二又鍬の2点の木器が出土した。槽は、溝西側にある井堰状の木組から西へ2mの地点に伏せた状態で、また、二又鍬は、溝東端から約6mの地点の溝南壁に張り付いた状態で出土した。

出土遺物

壺（Fig.15・16）

2は溝の覆土中より出土した壺形土器の口縁部で、復原口径16.8cm、現存高1.4cmを測る。短い「く」字状の口縁部は摘み出すようにして鋭角的に外反する。調整はヨコナデ。

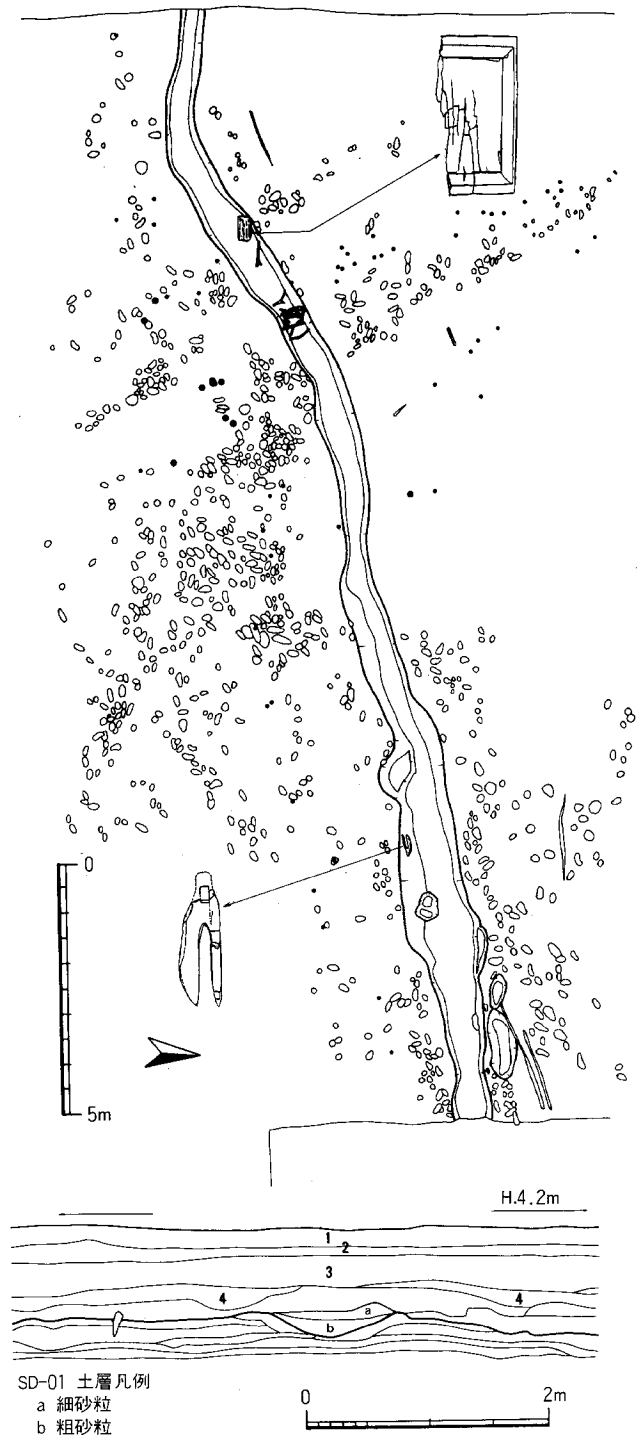


Fig. 12　SD-01実測図（1/150）

Fig. 13　SD-01全景（東より）

Fig. 14　SD-01木器出土状況（南より）

胎土は精良で微細砂を含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。

坏（Fig.15・16）

3 は復原口径13.2cm、器高4.1cm を測る須恵器坏蓋である。天井部は丸味をおび、体部中位にはシャープな三角凸帯状の段がつく。内弯気味に直口する口縁部は端部を小さく摘み出し、内傾する内唇部はわずかに凹む。調整は口縁～体部中位はヨコナテ。天井部は内面がナデ、外面はヘラ

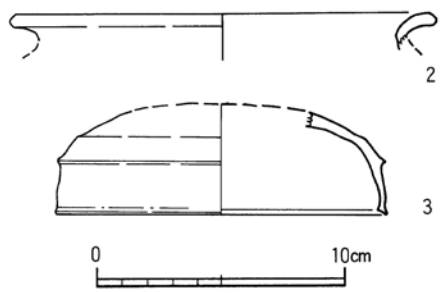


Fig. 15　SD-01出土土器実測図（1/3）

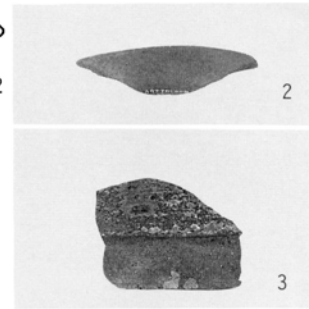


Fig. 16　SD-01出土土器

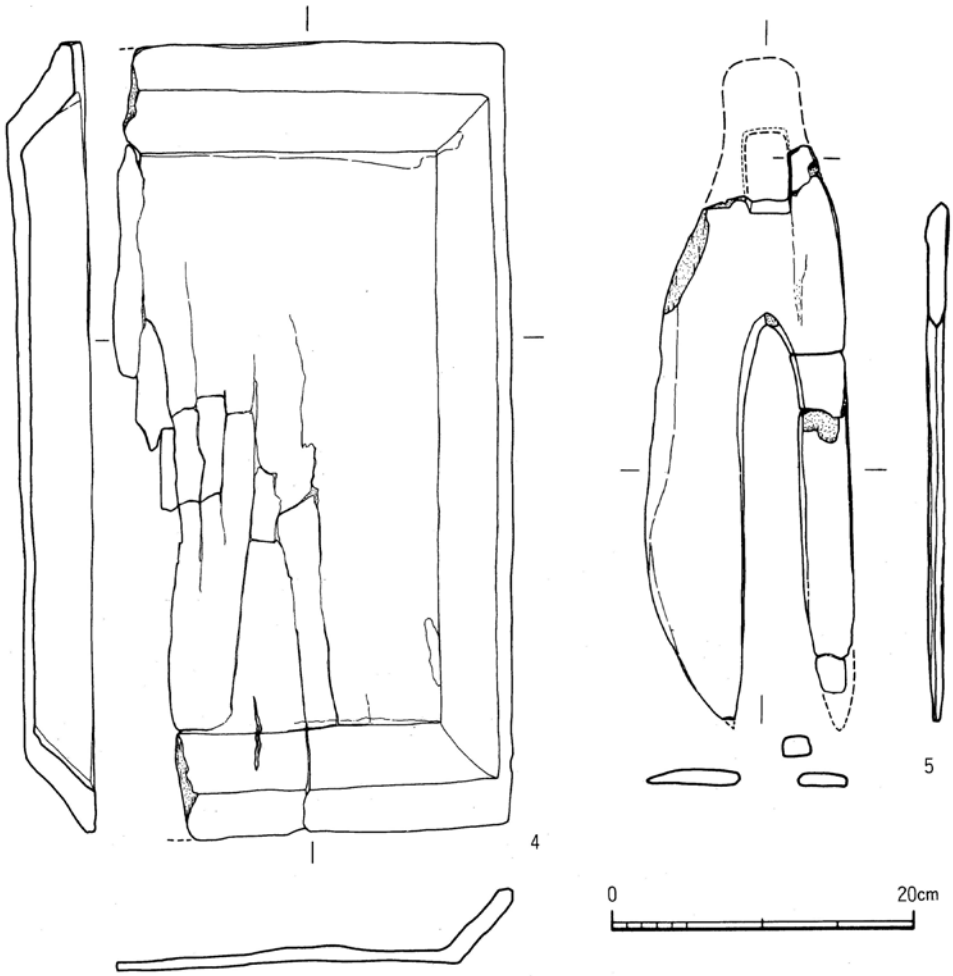


Fig. 17　SD-01出土木器実測図（1/5）

ケズリである。胎土は精緻で、焼成は堅緻である。色調は外面が灰色、内面は淡灰紫色。

槽（Fig.17・18）

4 はSD－01西部の溝底より伏せた状態で出土した縦木取りの刳り貫き槽で、側板及び底部の一部を欠失している。側板は45°前後の傾斜をもって切り込まれ、底板は平坦で板厚は８～10㎜を測る。横断面形は逆台形をなし、短側板は上端部を「L」字状に削り出して把手状に仕上げている。全長52.8㎝、器高5.3㎝、全幅は約35㎝に復原できよう。

二又鍬（Fig.17・18）

5 はSD－01の南部右岸より出土した柾目取りの二又鍬で、柄つぼから頭部は欠失している。刃は扁平な板状で外縁部は弧状をなし、肩はあまり張らない。右刃は左刃の約1／2と幅狭であるが、外縁は肩部から刃尖にかけて二次加工痕がある。本来は左右対称であったものが、右刃外縁の損失後に再加工を施して再利用したものと思われる。現長38.1㎝、刃部長26.2㎝、刃部幅13.9㎝を測り、復原全長は45㎝、復原刃部幅は16㎝になろう。樹種はカシ材である。

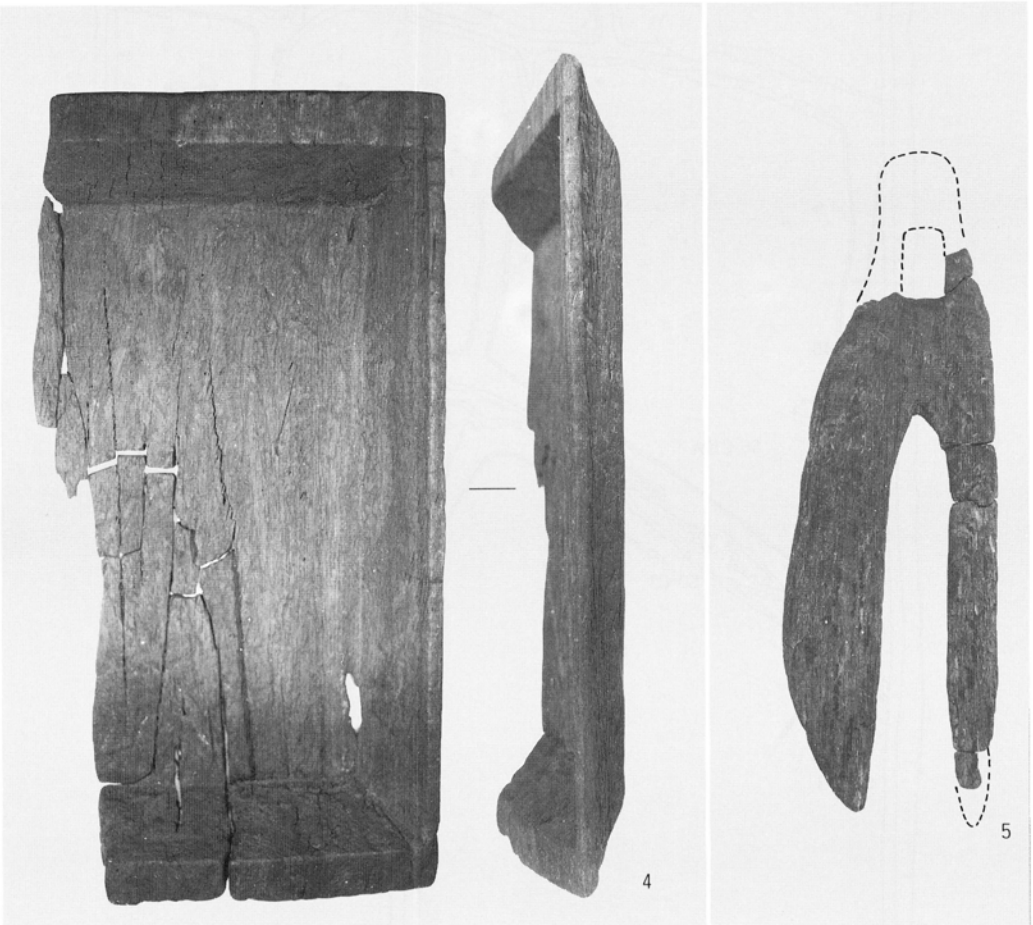


Fig. 18　SD-01出土木器

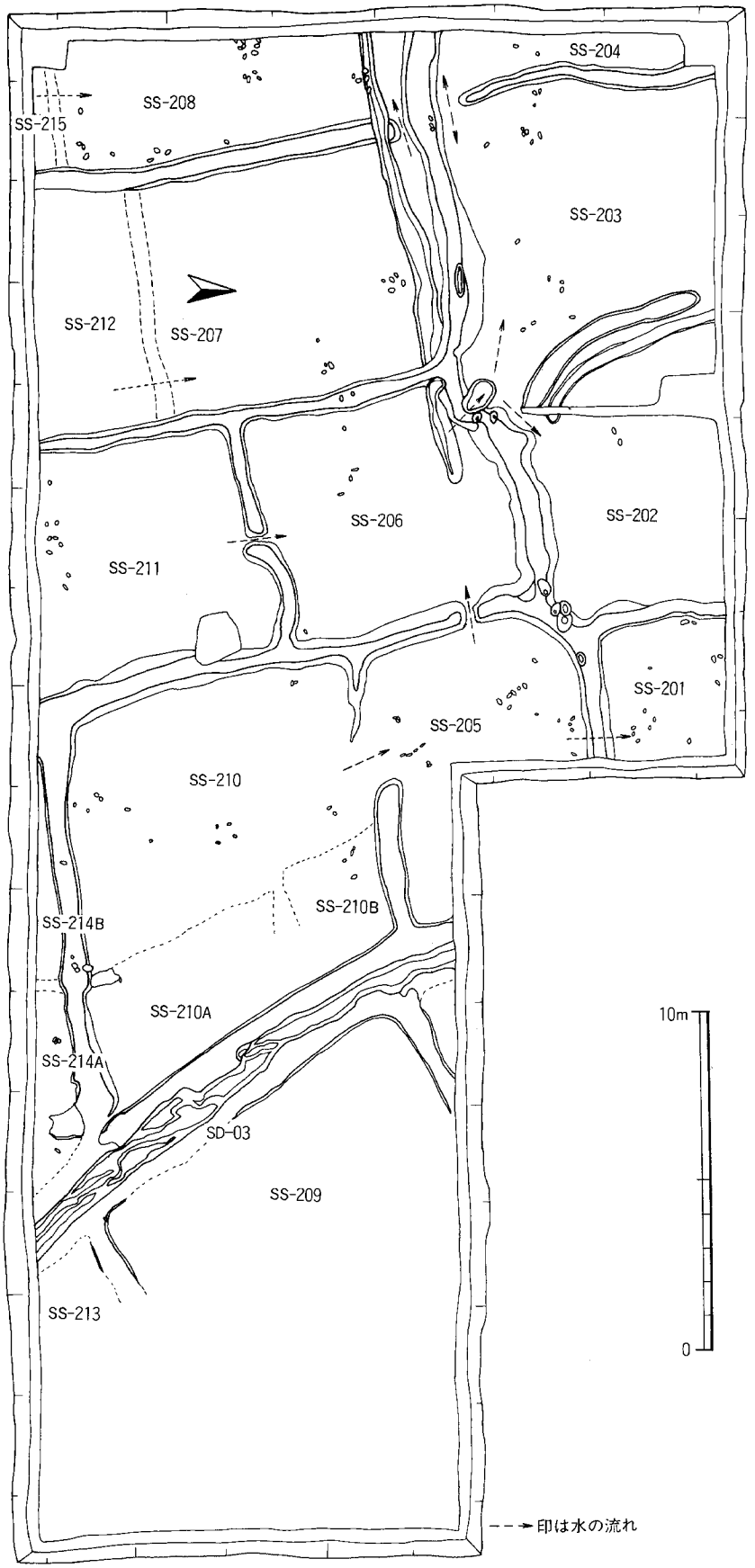


Fig.19　第２面水田址遺構実測図（1/200）

3．第２面の水田址

第２面の水田址は、第１面の水田耕土より20～25cm下層で検出した水田面である。水田址の外には調査区の東側で水路を１条検出したが、井堰等の施設はなかった。水田面は下流域の北にむかって低くなり、標高は南側で3.2m、北側は3.05mを測る。第1面の水田址との間には暗灰黄色粘土層と灰色粘砂土層の２層の間層がある。

水田面は調査区全域で18枚を検出したが、水路より東側は畦畔が消失しており明確ではない。調査区の拡張によって枚数はさらに拡がろう。調査区が狭小なために１枚すべてを検出できた水田址は少ないが、１枚の水田面は一辺の長さが５～９mの畦畔で矩形に区画され、耕作面積は45～60㎡と小規模である。畦畔は、調査区東側の水路に沿うように磁北より約10°ほど西へ振れて南北方向にのび、それに直交する東西方向の畦畔は階段状に少しずつずれてのびている。これら畦畔には、コーナーあるいは半ばに途切れる箇所があり、水口が付設している。畦畔の幅は50～100cmで、水路に沿うものと東西方向にのびるものが幅広になり、南北方向の畦畔はやや幅狭である。断面形は扁平な蒲鉾状をなし、５～10cm程の高さしか遺存していない。

水田址は、自然地形に沿って開削されている。旧地形は博多湾に開く北側が低くなっており、水田面も当然の如く帯状に並ぶ南側の一群が高く、北側の一群は低い。水田址で云えば、SS－211→SS－206→SS－202の順に低くなるが、実際の比高差は数センチにすぎない。

Fig.20　第２面水田址全景（西より）

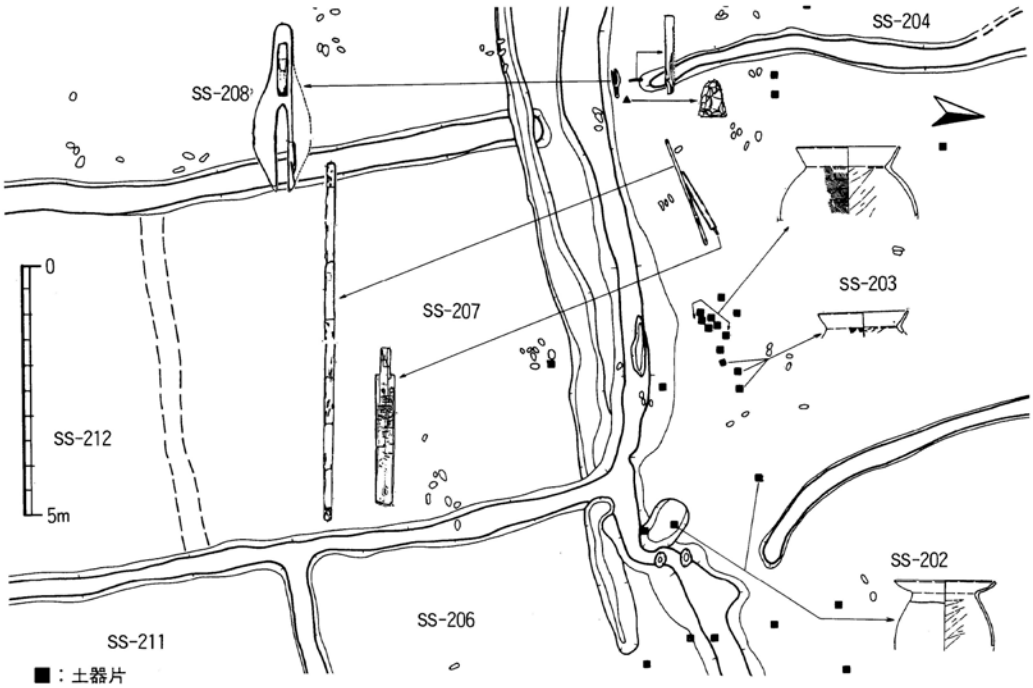


Fig. 21　SS-203・207実測図（1/150）

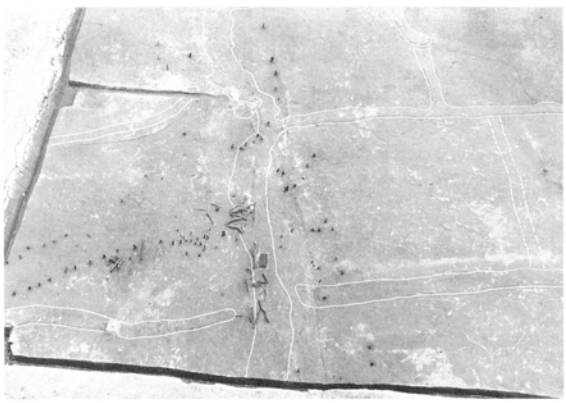


Fig. 22　SS-203・207全景（西より）

水田の水利も、この高低差を利用して水田毎に行なわれていたと考えられる。田面のレヴェル差からすると、調査区の東側を流れるSD－03より取り入れられた水は、SS－210からSS－205を通ってSS－201・206へ流れ込む。SS－206に集まった二つの流れは、北西隅の低い畦畔を越えてSS－203の水落口へ流れ込み、SS－203とSS－201の田面を潤す。その水は、さらに下流の水田面へと地形に沿って流れ、最終的にはSD－03かあるいは別の水路へ排水したものと思われる。

水路SD－03の東側は、西側水田址に比べてやや高い。そのため東西方向にのびる２～４ｍの畦畔２条を検出したにすぎず、水田規模等は明らかではない。

第２面の水田土壌は、黄灰色粘質土層で、畦畔も同じ土を盛って造っている。耕土中には下層の灰黄褐色粘砂土層や砂層がブロック状に堆積する箇所がある。これは十郎川の氾濫に起因するもので、砂層の面的な不拡大は水田の継続的な営農活動を窺わせるものである。

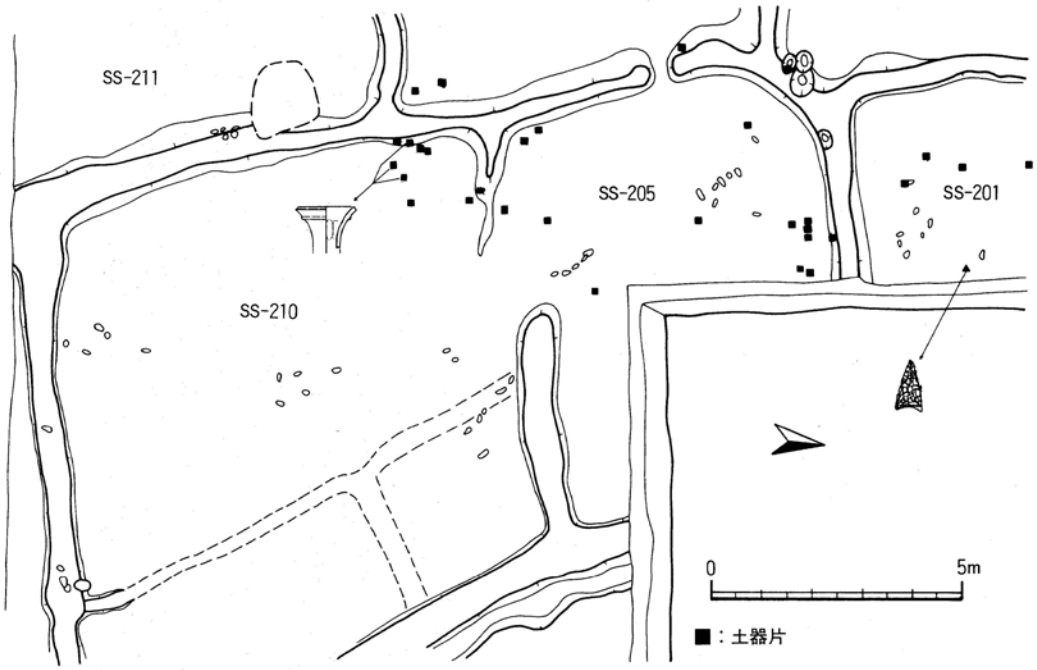


Fig. 23　SS-205・210実測図（1/150）

SD－03（Fig.27）

調査区の東部で検出した幅70～110cmの水路である。溝は緩やかな孤を描きながら南東方向から北北西へ流れる。現長は約15mで深さは15～20cmを測り、断面形は浅い舟底状を呈する。溝底は小さな流路が蛇行して流れ、岸側には低いフラット面が幾つもついている。溝中には護岸の杭や井堰等の取水施設はなかった。この溝の両岸には幅50～90cmの畦畔が流れに沿ってつき、さらに、直交する東西方向の畦畔がつく。覆土は、下層に粗砂層で、上層には耕土であろう灰黄褐色粘砂土層が堆積していた。

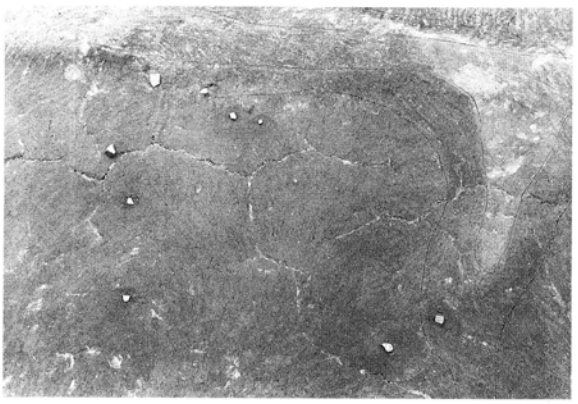


Fig. 24　SS-210遺物出土状況（東より）

出土遺物

甕形土器（Fig.29・30）

6～**8**はSS－203の南側畦畔近くより出土した「く」字状口縁の甕形土器である。**6**は口径16.0cm。外反する口縁部は内弯気味に開き、内唇端部は上方に小さく摘み出す。胴部は卵形を

Fig. 25　SS-205・206・211全景（西より）

Fig. 26　SS-203水口址全景（東より）

Fig. 27　SD-03全景（北より）

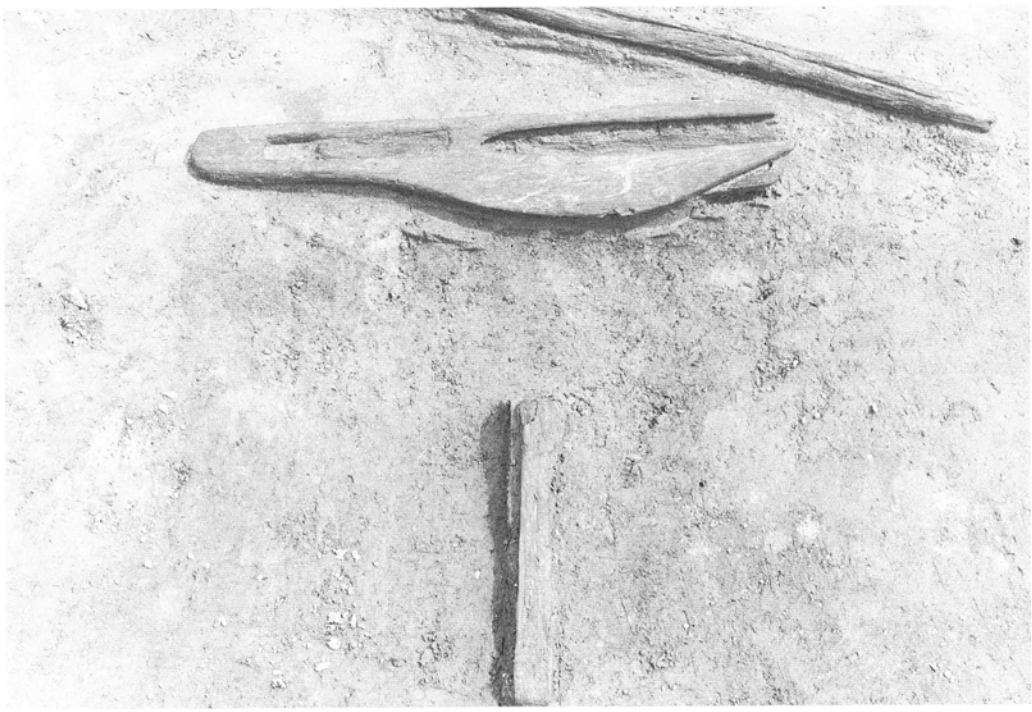


Fig. 28　SS-203木器出土状況（北より）

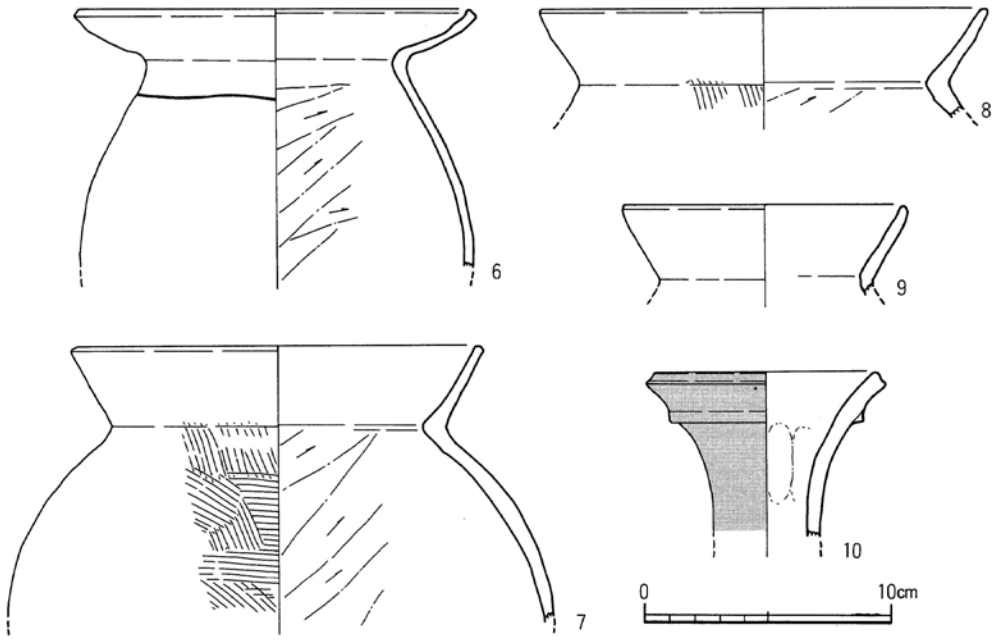


Fig. 29　第２面水田址出土土器実測図（1/3）

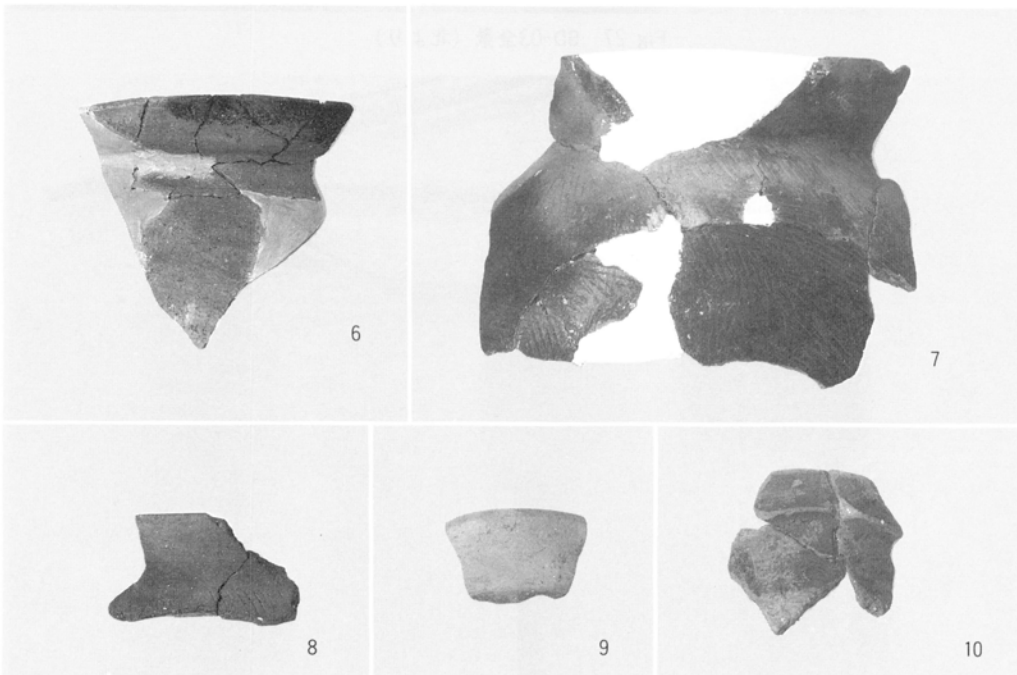


Fig. 30　第２面水田址出土土器

なし、頸部下には箆描きの凹線が１条巡る。調整は胴部外面がナデ、内面はヘラケズリ。胎土は細～中砂粒と雲母微細を多く含み、色調は黄褐色。**7**は口径16.4cmを測る。口縁部はストレートに外反し、胴部は球形をなす。調整は外面が粗いハケ目、内面はヘラケズリ。胎土には石英砂と雲母を含む。**8**は口径17.8cmを測る。口縁部はストレートに外反する。調整は外面がハケ目、内面はヘラケズリ。胎土は細～中砂粒と雲母を含み、灰白色を呈する。

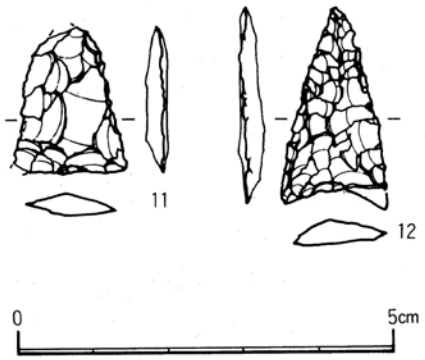


Fig. 31　第２面水田址出土石器実測図（1/1）

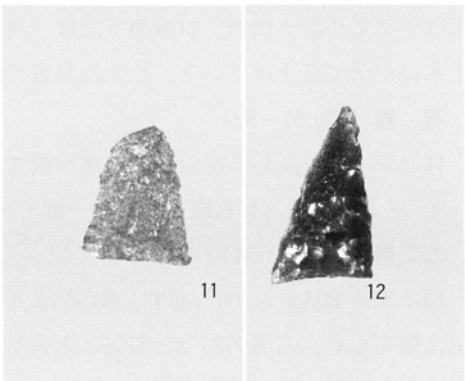


Fig. 32　第２面水田址出土石器

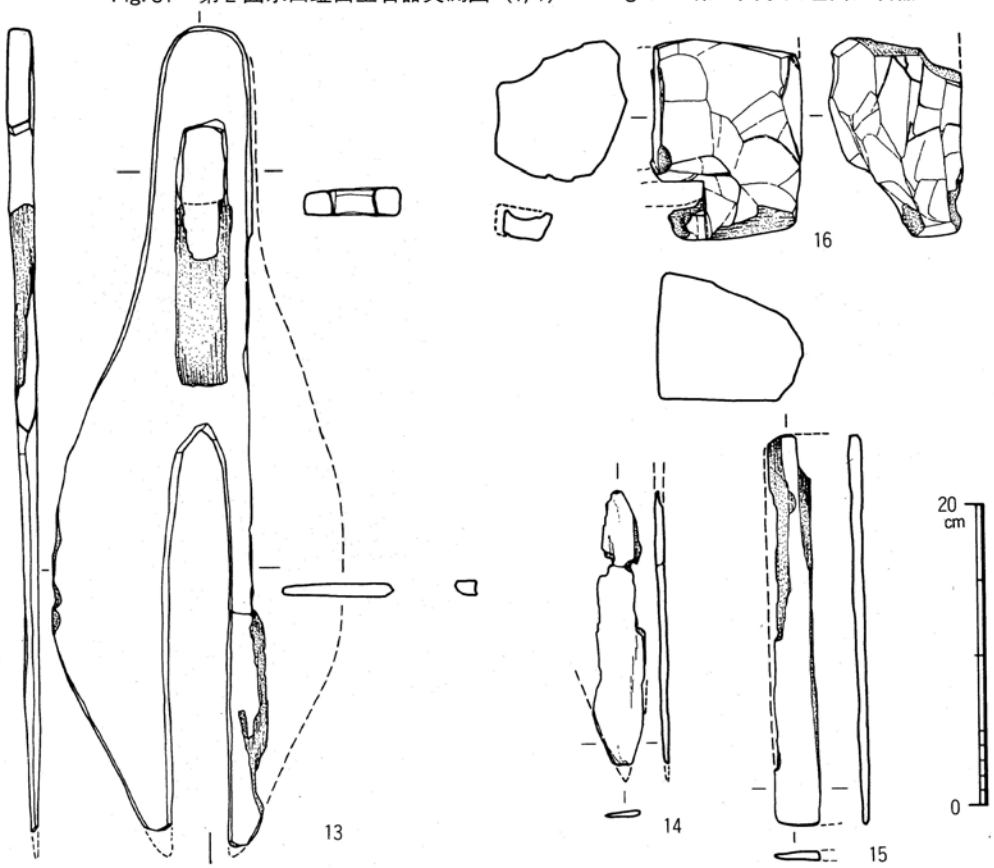


Fig. 33　第２面水田址出土木器実測図（1/5）

壺型土器（Fig.29・30）

9はSS－206出土の小型丸底壺で、口径は11.4cmを測る。「く」字状の口縁部は短くストレートに開く。胴部は偏球形になろう。調整は口頸部がヨコナデ、胴部内面はナデ。**10**はＳＳ－210出土の丹塗りの細頸壺で、口径は9.6cm。口縁部は細長い頸部からストレートに外反し、端部はナデて小さく凹む。口縁部下には三角凸帯が１条巡る。調整は口縁部がヨコナデ、頸部は丁寧にナデて仕上げている。胎土は良質で細～小砂粒と雲母を含む。

石　器（Fig.31・32）

11はSS－201出土の安山岩質三角形鏃である。先端部を欠き、現長は1.9cmを測る。**12**はSS－203出土の黒曜石製石鏃で、関の一部を欠いている。長さは2.65cm、幅は1.0cmを測る。

二又鍬（Fig.33・34）

13はSS－203から204へ通ずる水口部より出土した。刃は扁平な板状で外縁部は弧状をなし、肩は張らない。右刃の2／3と刃尖は欠失しているが本来は左右対称であったろう。全長は55.0cmで、刃部幅は20cmに復原できる。頭部長は11.5cm、頭部幅は7cm、刃部長は29.5cm、刃幅は9.7cm、柄孔長は５cm、柄孔幅は2.7cmを測り、柄は柄孔に対し24°の角度で装着される。木取りは

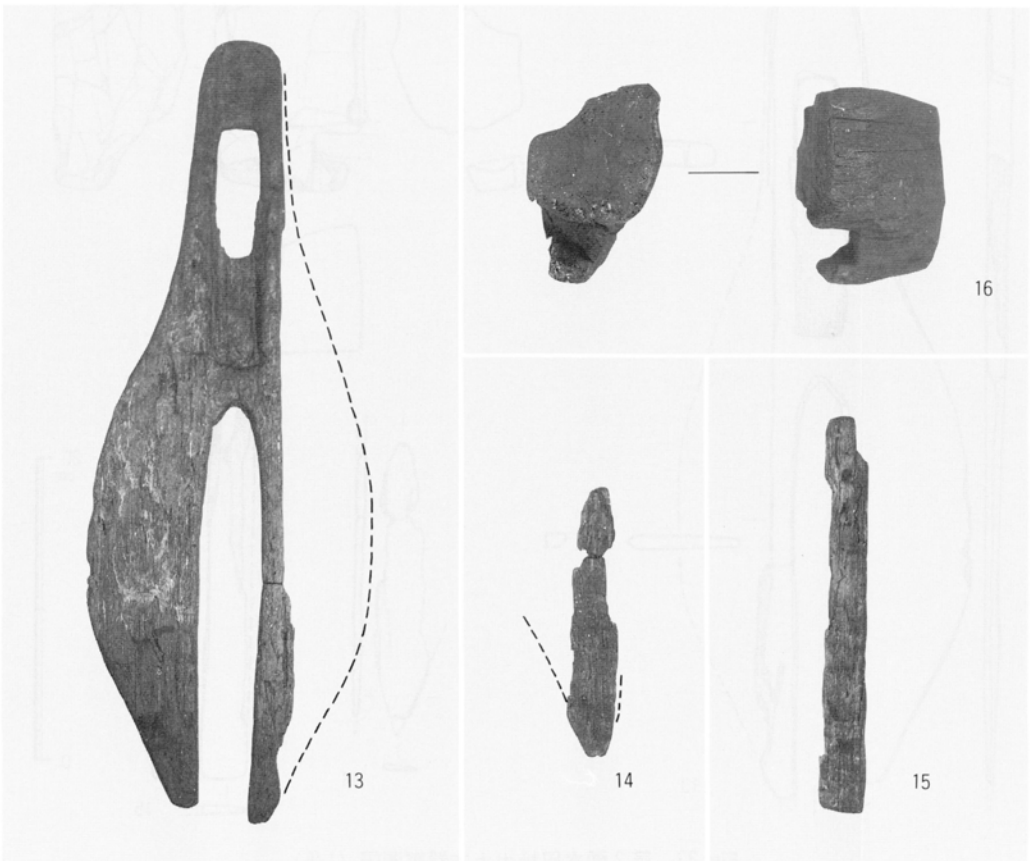


Fig. 34　第２面水田址出土木器

柾目取りで、樹種はカシ材である。**14**はSS－203の南側畦畔近くから出土した鍬の刃部で、刃部外縁は弧状をなそう。現存長は18.2cm。木取りは柾目取りで、樹種はカシ材である。

不明木器（Fig.33・34）

15は柾目取りの用材で、両端部と側縁部には面取り加工が加えられている。全長は26.0cm、現存幅は3.0cmで、厚さは端部が２mm、芯央部６mmを測る。用材としては、木入かとも考えられるが、鋤の可能性も否定できない。樹種はカシ材である。**16**は側縁や底面に粗削り痕の残る未製品である。製品としては舟形をした槽の把手部と思われるが、建築材の可能性も少なからずある。木取りは芯刳り貫きの板目取りで、樹種はクリ材と思われる。

建築材（Fig.35・36）

17・**18**は建築材であろう。**17**は両端部を欠き、現長103.8cm、幅12.8cm、厚さは端部で2.3～2.7cm、芯央部で3.1cmを測る。両端部には幅6.7～7.0cmの造り出し部があり、裏面には深さ1.3cmの箱状の切り込みがある。木取りは板目取り。**18**は全長232.7cm、幅5.3～6.6cm、厚さは1.9～2.6cmを測る。ナナメ取りした用材の四面を削りだして棒状に仕上げている。端部は一方の上端を鉤状に造り出し、下端は舟底状に丸く削りだしている。いずれも用途は判別できない。

Fig. 35　第２面水田址出土建築材実測図（1/10）

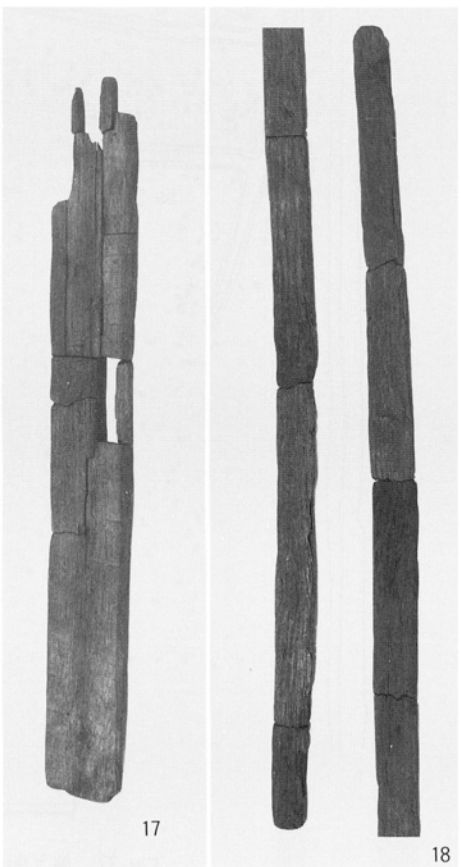


Fig.36　第２面水田址出土建築材

4．第3面の水田址

第3面の水田址は、第2面の水田耕土より10cmほど下層で検出した水田面である。水田面の標高は南側で3.1m、北側は2.95～3.0mを測る。第2面の水田址との間には灰黄褐色粘砂土層が間層としてある。第3面の水田址は土層観察では明確な確認は出来ていなかった。しかし、第2面の水田址SS－207・212の耕土中には幅20～30cmの粗砂層が溝状に続いていた。この粗砂層はSS－304とSS－305の畦畔を薄く覆っていたもので、粗砂層を除去し、畦畔を追うことによって第3面の水田址を確認した。

水田面は調査区の西半部で10枚を検出したが、畦畔の遺存状況が悪く、水田面1枚を完全に

Fig. 37　第3面水田址遺構実測図（1/200）

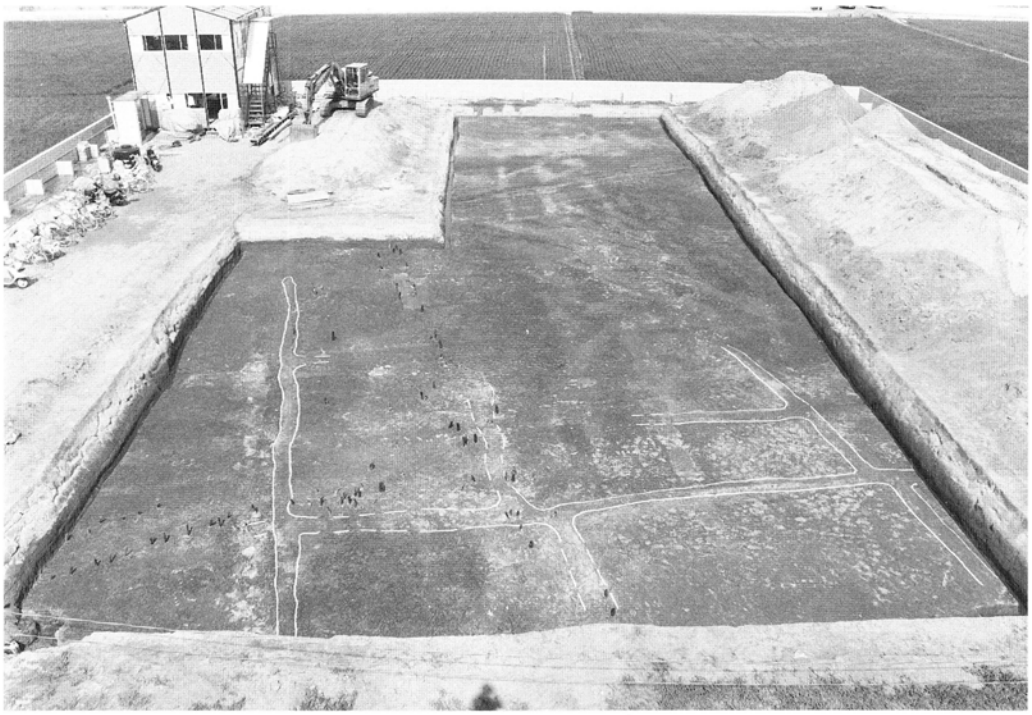


Fig. 38　第3面水田址全景（西より）

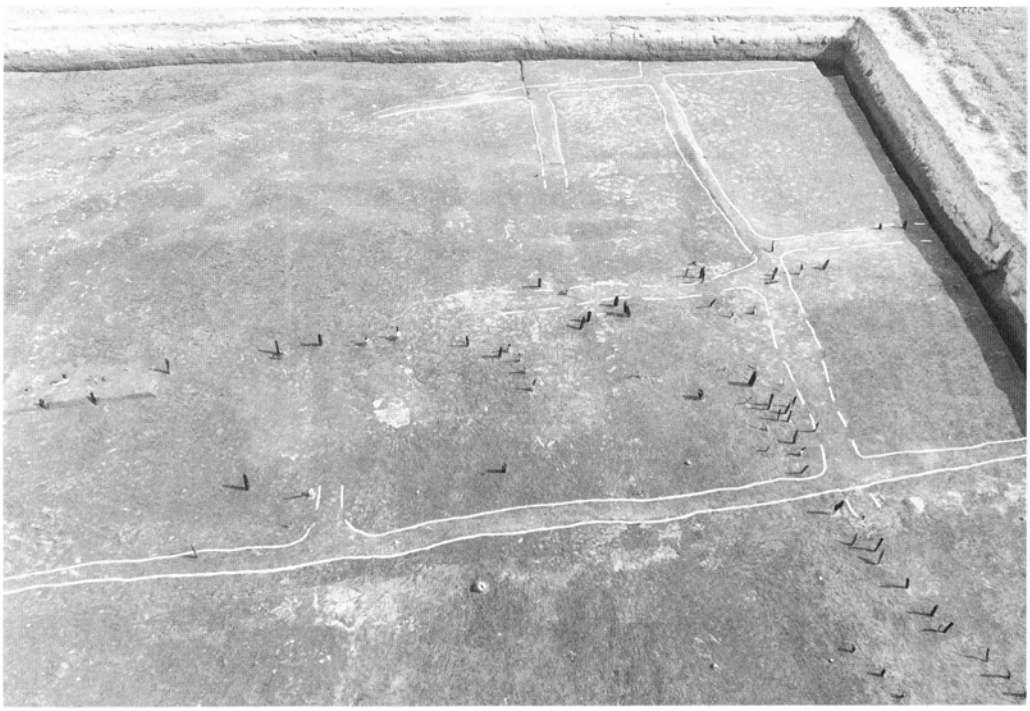


Fig. 39　SS-301～310全景（北より）

Fig. 40　SS-301～309全景（西より）

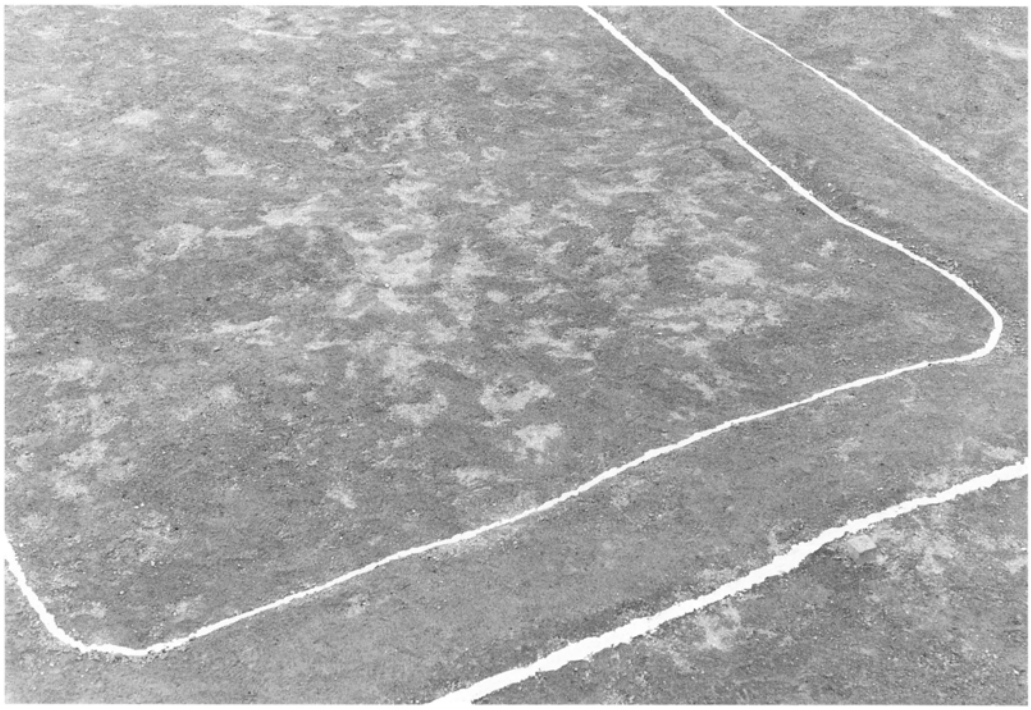


Fig. 41　SS-305足跡検出状況（南より）

確認できたものはない。辛うじて畦畔が復原できる水田址はＳＳ－305とSS－306で、その耕作面積はSS－305が22.5m²、SS－306が39m²となり、第２面の水田址と比較してもかなり小規模である。水田面は、東西と南北方向に直交してのびる畦畔によって方形～長方形に整然と区画されている。畦畔は一辺の長さが３～９ｍで、幅は35～60cmと比較的狭い。水田面との比高差も３～６cmと低く、断面形は扁平な台形をなす。

これらの水田址は、第２面と同様に南から北へむかって低くなり、水利も田面の高低差を利用して北へ流されたものであろうが水口は検出されていない。

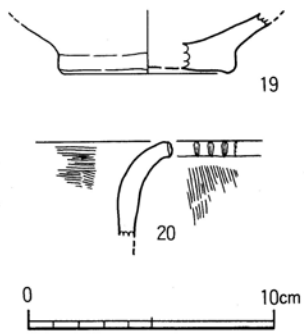


Fig. 42　第３面水田址出土土器実測図（1/3）

第３面の水田土壌は、砂粒の混じったオリーブ黒色粘質土である。畦畔はこの水田耕土と同じ土を盛り上げて造っているが、一部には砂層と互層をなす箇所が観察された。このことは河川の氾濫に際して繰り返し修復して耕作されたことを意味するものであろう。また、田面には人の足跡が多数残っていた。

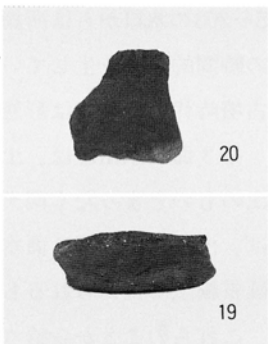


Fig.43　第３面水田址出土土器

出土遺物

壺型土器（Fig.42・43）

19は底径7.0cm、現存高2.4cmを測る壺型土器の底部資料である。底部はやや上げ底気味になり、粘土紐の貼付けによって高く作り出す。胴部は偏球形になるものであろう。調整は外面がナデ、内面は押圧ナデである。胎土には細～中砂粒と雲母微細を含み、焼成は良好。色調は外面が灰黄褐色、内面は淡黒褐色を呈する。

甕形土器（Fig.42・43）

20は甕形土器である。口縁部は小さく外方に摘み出すいわゆる如意状をなし、端部には箆状工具による刻み目を施す。胴部は内弯気味に直口して窄まる形状をなそう。調整は外面がヨコナデ、内面は口縁部がヨコハケ目、胴部はナデ仕上げ。口唇部から外面にかけては煤が付着している。胎土には石英砂と雲母微細を含み、色調は外面が淡黒褐色、内面は灰黄褐色。

No.	面積（m²）	No.	面積（m²）	No.	面積（m²）
201	13.5m²＋α	207	51.5m²	211	42.5m²＋α
202	35.9m²＋α	208	32.5m²＋α	212	24.5m²＋α
203	60.5m²＋α	209	32.5m²＋α	213	5 m²＋α
204	10m²＋α	210	55.5m²	214	3.5m²＋α
205	27.5m²＋α	210-A	18.5m²	214-A	5.5m²
206	45.5m²＋α	210-B	10m²	215	2 m²＋α

Fig. 44　第２面水田址面積一覧表

No.	面積（m²）	No.	面積（m²）
301	1 m²＋α	307	15m²＋α
302	33m²	308	41.5m²＋α
303	20m²	309	34.5m²＋α
304	14m²	310	33.5m²＋α
305	26m²		
306	36.5m²		

Fig. 45　第３面水田址面積一覧表

Ⅳ．おわりに

拾六町平田遺跡は、水田址と水路からなる水稲生産遺跡で、住居址や墳墓等の生活遺構は一切検出されていない。発掘調査では、3面の水田址とそれに伴う水路（溝）を検出した。しかしながら、第2面の水田址を除いては畦畔等の遺存状況は悪く、その規模や構造を十分に把握することはできなかった。

拾六町平田遺跡では、まずはじめに第3面水田址が可耕される。遺構の性格上遺物の過少さは否めないが、SS－309の耕土上からは板付Ⅰ式に比定しうる如意状口縁の甕や壺が出土していることから弥生時代前期に比定できよう。

次に第2面水田址では、SS－210の畦畔際からは丹塗りの細頸壺が出土している。一方、SS－203の水口からは所謂布留式の甕と二又鍬や建築材等の木器が出土しており、そこに多少の時間的差異を生じている。しかしながら、二又鍬等の農工具でみるかぎり弥生時代後期から古墳時代にかけては形態的な差異はなく、この大きな時間幅のなかで捉えられよう。

第3面の水田址は、土器の出土がなく明らかではないが、SD－01出土の二又鍬はSS－203出土のものとまったく同タイプである。また、槽も同期に多くみられるものであることからすれば、氾濫による第2面水田址の埋没後に水路を掘り直して修復されたと考えられ、同一時間の延長線上で捉えられるものであろう。

これらのことから拾六町平田遺跡での営農活動期は、大きく2時期に分けられる。つまりⅠ期：弥生時代前期に始まり、休耕期間をおいてⅡ期：弥生時代後期から古墳時代前期に再び可耕される。しかし、第1面の水田址上層に堆積する灰黄褐色土層・暗灰黄色粘土層の3ａ・ｂ層は、面的には未確認ながらも重層的に堆積する明らかな水田土壌である。土層中からは、糸切りの土師皿や白磁皿が出土していることから古代末から中世に比定できる。このことは弥生時代以来、一時的な途絶はありながらも古代から中世を経て今日まで耕地としての生産機能を果たし続けてきたことを物語っている。

早良平野では、弥生時代前期に遡る水田址遺構は未報告で、本遺跡例が初見である。板付遺跡にみられるような水路や井堰等の取水施設は検出されなかったが、矩形にのびる畦畔の検出は、初期段階より整然とした水田経営の在り方を示唆するものである。本遺跡の西にある石丸古川遺跡からは前期の土器とともに太形蛤刃石斧や石包丁が、拾六町ツイジ遺跡からは前期初頭の土壙から諸手鍬やエブリ等が出土している。これらは、山裾に拡がる低湿地が可耕地とされた証左となり、沖積地への進出が初期農業期から積極的に進められたことを示す。

弥生中期後半から古墳時代になると可耕地は沖積地全域に組織的に拡大し、安定期に入る。遺跡の拡大とともに出土する農耕具等がそれを示唆する。開墾具としての農具と維持管理具としての農具の消長にそれを見出だせようが、なお今後の資料増加を待ち検討が必要である。

付　　論

拾六町平田遺跡第１次調査の花粉分析

北九州大学　　野井　英明

拾六町平田遺跡第１次調査の花粉分析

北九州大学　　野井　英明

福岡市西区拾六町平田遺跡の発掘調査に伴って得られた試料の花粉分析を行なった。試料は、南壁から14点を採取し、図１に示す６点から分析に十分な花粉・胞子化石が得られた。

化石花粉は、10％KOH処理、飽和$PbCl_2$水溶液による重液分離、アセトリシス処理によって抽出し、グリセリンジェリーを用いて封入した。同定は、400倍の光学顕微鏡下で花粉・胞子化石の総数が400～500個になるまで行ない、結果を樹木花粉を総数とする百分率をダイアグラムで示した（図２）。

結　果

花粉分析によって検出された花粉・胞子化石は、次のとおりである。

ＡＰ（高木類花粉）

Pinus（マツ属）、*Abies*（モミ属）、*Tsuga*（ツガ属）、*Cryptomeria*（スギ属）、*Podocarpus*（ナギ属）、*Alnus*（ハンノキ属）、*Carpinus*（シデ属）、*Fagus*（ブナ属）、*Lepidobalanus*（コナラ亜属）、*Celtis-Aphananthe*（エノキ－ムクノキ属）、*Ulmus-Zelkova*（ニレ－ケヤキ属）、*Myrica*（ヤマモモ属）、*Castanopsis*（シイ属）、*Cyclobalanopsis*（アカガシ亜属）。

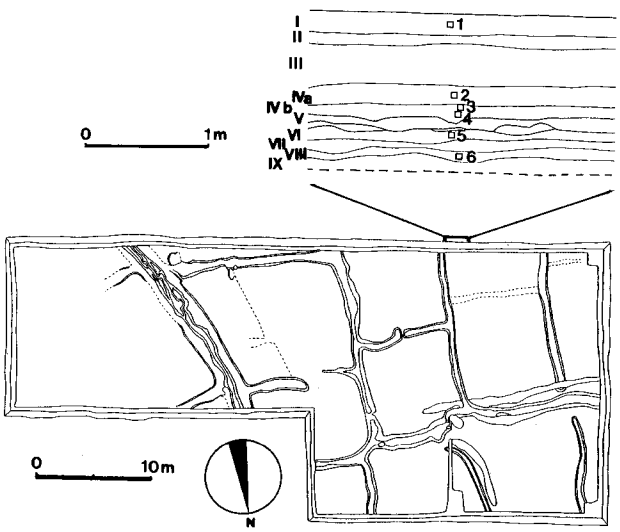


図　１　花粉分析試料サンプリング地点

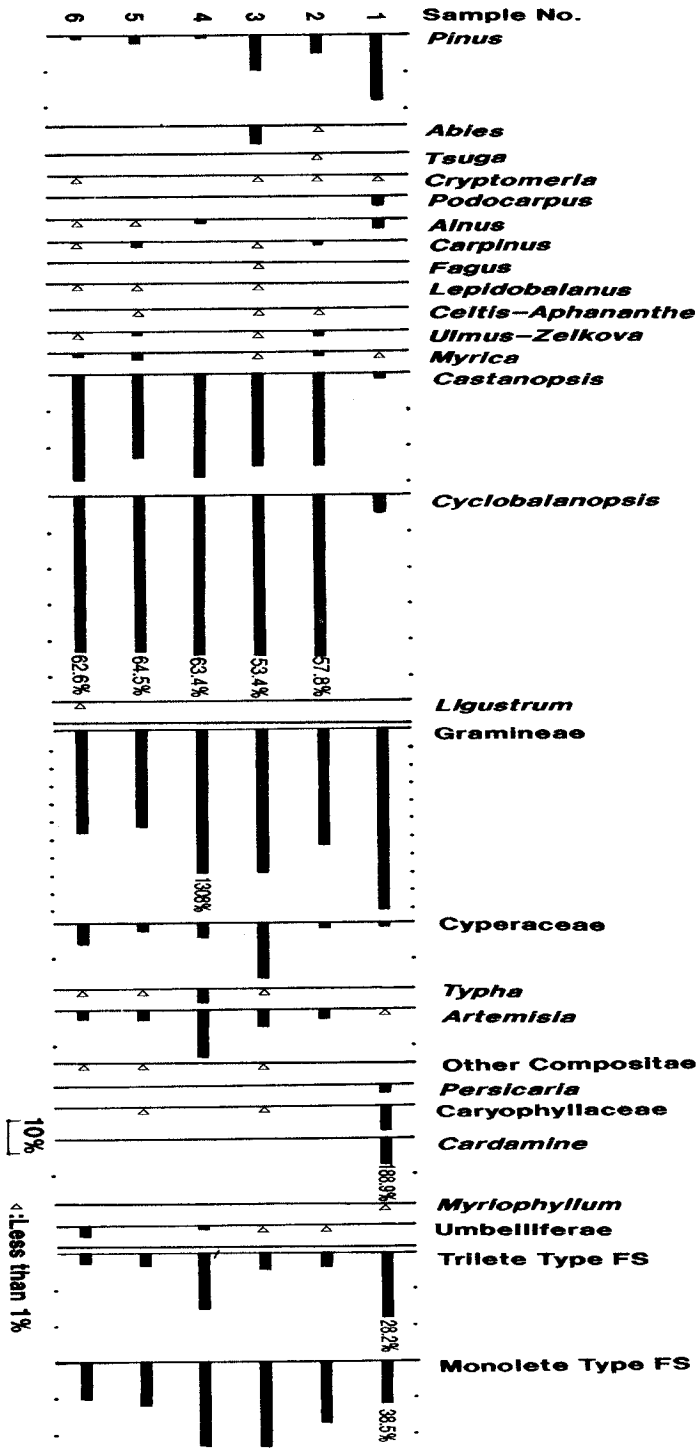

Sample No.
6
5
4
3
2
1
Pinus
Abies
Tsuga
Cryptomeria
Podocarpus
Alnus
Carpinus
Fagus
Lepidobalanus
Celtis–Aphananthe
Ulmus–Zelkova
Myrica
Castanopsis
Cyclobalanopsis
62.6%
64.5%
63.4%
53.4%
57.8%
Ligustrum
Gramineae
1308%
Cyperaceae
Typha
Artemisia
Other Compositae
Persicaria
Caryophyllaceae
Cardamine
188.9%
Myriophyllum
Umbelliferae
Trilete Type FS
29.2%
Monolete Type FS
38.5%
10%
Less than 1%

図　2　花粉ダイアグラム

ＮＡＰ（低木・草本類花粉）

Ligustrum（イボタノキ属）、Gramineae（イネ科）、Cyperaceae（カヤツリグサ科）、*Typha*（ガマ属）、*Artemisia*（ヨモギ属）、Other Compositae（その他のキク科）、*Persicaria*(タデ属)、Caryophyllaceae（ナデシコ科）、*Cardamine*（タネツケバナ属）、*Myriophyllum*（フサモ属）、Umbelliferae（セリ科）。

ＦＳ（シダ類胞子）

Trilete type FS（三条型シダ類胞子）、Monolete type FS（単条型シダ類胞子）。

Ⅸ層からⅣ層では、樹木花粉はシイ属、アカガシ亜属で木本類の80％余りを示す。これら以外の木本類は、Ⅳｂ層でマツ属、モミ属が約10％ずつ出現するほかは、きわめて低率である。草本類は、イネ科が60～70％を占め優占する。それ以外には、カヤツリグサ科、ヨモギ属、ガマ属が連続して検出される。

Ⅰ層では、シイ属、アカガシ亜属は著しく減少し、かわってマツ属が木本花粉の90％近くを占めて優占する。草本類は、やはりイネ科が卓越し、カヤツリグサ科、ナデシコ科、タネツケバナ属などを交える。

考　察

Ⅸ層からⅣａ層の時代は、シイ、カシ類の花粉が木本類の80％余りをしめるところから、調査地域周辺は、シイ、カシ類で構成される照葉樹林に覆われていたと考えられる。二次林としてはえることの多いマツ属が、数％と低率であることから、これらの森林は、人類の手がほとんど入らないままに繁茂していたであろう。しかし、草本類が高率で出現することから考えると、発掘地点は、森林の密度は低く、イネ科を中心とする草地の部分も多かったであろう。堆積物が暗青灰色ないし青黒色のシルトあるいは粘土であること、また、数層の洪水層を挟むことから、発掘地点は、かなり排水の悪い地域であり、時には洪水にみまわれたと考えられ、そのために、森林の発達が疎外されたと考えられる。

Ⅰ層の時代では、マツ属が卓越し、シイ属、アカガシ亜属が低率であることから、Ⅳａ層の時代まで調査地域周辺で繁茂していた照葉樹林は人類によって破壊され、かわって二次林であるマツ類が優勢になったと推定される。同層は、現在の水田土壌であることから、検出される草本類のうち、カヤツリグサ科、タデ属、タネツケバナ属はホタルイ、サナエタデ、タネツケバナなどの水田に普通にみられる雑草類であると推定される。

今回分析を行なった層準には、現在の水田土壌であるⅠ層を含めて、Ⅲ層、Ⅵ層の３層の水田土壌が含まれている。水田には、コナギ、オモダカ、ホタルイ、タネツケバナなどの水田に特有な雑草類がはえることが知られている。たとえば、これらの層準からともに検出される

カヤツリグサはホタルイを主とするものであると推定される。しかし、現在の水田に普通にみられるタネツケバナは、Ⅰ層からは多量に検出されるが、Ⅵ層からはまったく検出されていない。この原因については、現在のところ不明であるが、タネツケバナの起源や生態、イネの栽培方法などに関連している可能性があり、今後の研究課題になろう。

拾六町平田遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第305集

1992年３月13日発行

発 行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神１－８－１

印 刷　大野印刷株式会社